

＜3歳クラス I期 4月＞「寄り添い、安心できる場所に」

これまでの保育の様子

これまでの生活経験や育ちが異なる3歳クラス児にとって、初めての附属幼稚園での園生活が始まった。入園式の日から、幼児一人一人の登園時の様子や「あそび」の時間の様子、「せいかつ」の時間の様子を担任・副担任で共有してきた。そして、幼児をまるごと受け入れ、とことん寄り添い、幼稚園が安心して過ごせる場所になることを第一に考え、援助していこうと話し合った。

入園当初、母親と離れることに不安を感じ、泣いている幼児の姿が多く見られた。そのような場合、無理に母親と離そうとはせずに、母親にも保育室へ入ってもらい、幼児と一緒に朝の支度をしてもらった。そして、母親には幼児が支度をしている間に、様子を見ながらそっと保育室を出てもらうことにしていた。

入園式翌日、A児が支度を終えて外へ出ようとする、母親がいなくなっていることに気づき、泣き始めた。担任が「お母さん、トイレに行ったのかな。戻ってくるまで、遊んで待ってる？」と聞くと、うなづいて外に出た。しばらくすると、担任の所へやってきて、「ママが来るまで遊んでよ」と言って砂場で遊び始めた。その翌日は、朝の支度が終わると、保育室前のテラスでしくしく泣いていた。2日間の様子から、担任と副担任はA児が安心して遊び出せるように、A児は何が好きなのか、A児の心を動かすものが何なのかを探っていくことを確認した。

4月12日

A児が朝の仕度を終え、テラスに行く。外を見ながら泣きじゃくる。

A児：「ママがいい」

5歳クラス児：「どうしたの？」

A児：「ママがいい」

副担任：「ママがいいんだね」

5歳クラス児：「大丈夫だよ」

5歳クラス児はその場を離れ、お花やオタマジャクシを持ってくる。

5歳クラス児：「どうぞ」

A児の前に置く。

副担任：「わあ、すてき」

副担任は、近くに担任が来たタイミングで、これまでの様子を伝える。

担任：「Aちゃん、これなあに？」

A児：「オタマジャクシ」

担任：「へえー。すごーい。幼稚園には、オタマジャクシもいるんだね。どこにいるんだろう」

A児：「どこにいるの？」

5歳クラス児：「池にいるよ」

この日、テラスで大きな声をあげて泣いているA児の姿を見て、5歳クラス児がA児を心配して寄ってきた。そして、お花を摘んだり、オタマジャクシを茶碗に入れたりしたものを見せていた。その様子を副担任から聞いた担任は、A児がオタマジャクシをじっと見つめる様子から、もしかしたら、生き物や水に興味があるのではないかと捉えた。そこで、今後も継続して、A児の楽しみは何なのかを読み取って、遊び出しにつなげていこうと確認した。

4月14日

A児は「帰る！！」と言いながら、母親と登園する。母親と支度を済ませ、母親が帰ると保育室で泣きじゃくる。

A児：「帰りたい」

副担任：「じゃあ、帰ろうか」

A児は、副担任と靴を履き替え、外へ出る。登園で歩いた道を進んでいくが、フェンスのところまで行って、門が閉まっていることが分かる。

副担任：「お外行けないね。どうしようか」

A児：「幼稚園を壊す」

副担任：「そっかあ。幼稚園壊したいんだね。どうやって壊そうか」

G児：「これで壊す」

A児は水盤の水を流し始める。すると、地面の砂が流れ、土の部分が見える。

副担任：「あ、幼稚園壊れてきたよ」

A児：「やったー！」

副担任：「やったー！」

A児はその後も水を流し続ける。

A児はこの日も母親の姿が見えなくなると、保育室で大きな声で泣き始めた。担任・副担任とで、A児の思いを受け止め、とことん寄り添っていこうという心もちを共有していた。副担任は、A児の「帰りたい」という思いに寄り添い、一緒に門のところまで行くことにした。副担任は、池の近くを通ったり、雨どい遊びをしている幼児の近くを通ったりして、A児が興味を示すものはないかを観察しながら歩いた。そして、門のところまで来ると、A児の「幼稚園を壊したい」という思いもそのまま受け止めた。このことをきっかけに、水を使って遊ぶことに心ひかれたA児はこの後、土山の上から水を流し、山を壊す遊びを始めた。

A児のやりたい思いを大切にし、それに寄り添った援助をすることで、A児は水を使った遊びに楽しみを感じているのではないかという理解につながった。そして、A児が安心して遊び始められるように、水盤の近くにたらいを置いたり、日々のクラス新聞の中でA児の様子を意図的に掲載し、受け入れの際のA児との会話のきっかけにしたりしようと考えた。

4月22日

担任：「おはよう。Aちゃん」

A児：「おはよう」

担任：「昨日のこれ、楽しかったね」

A児：「うん。でも、今日はちょっと寒いな」

担任：「そうだね。今日はちょっと寒いね」

朝の支度を終えると、A児は水盤の水を勢いよく出している。

担任：「Aちゃん、何したいの？」

A児：「洗車してるんだよ」

担任：「あー、これ洗いたかったんだね」

A児：「うん、そう。これよごれちゃったんだ」

担任：「そうだったんだね。ピカピカになると、うれしいね」

A児：「うん」

担任：「そうだ、ここにこんなものもあるよ」

A児：「これでごしごしすると、きれいになるね」

担任：「わあ、本当だ。きれいになってきたね」

A児は朝登園すると、水盤に向かうことが多くなり、たらいを使った水遊びをするなど、水を使った遊びに興味を向いていることを担任と副担任で共有してきた。この日は水道の蛇口を3人乗りのバギーに向け、勢いよく水を出していた。A児が自らバギーを持ってきて、水を使って洗車をしていることに驚きながらも、自ら遊び始めていることにうれしくなった。そして、そのやりたい思いを支えたいと願い、たわしがあることを伝えた。そのことで、タイヤや座面を磨くなどさらに遊びが続いていった。担任はうれしそうに洗車をするA児に共感し、一緒に洗車を楽しんだ。

自らバギーを運び、洗車しているA児の姿を見て、幼児の思いに寄り添うことが、安心して自分のやりたいことを見付けて、やってみようとする姿につながるのではないと考えた。

考察

幼稚園生活のスタートであるⅠ期。どの幼児にとっても幼稚園が安心できる場所、そして楽しく遊ぶことができる場所になることを願って、まずは幼児一人一人のことをよく知り、そのうえで幼児の思いに寄り添うことを大切にしてきた。日々の振り返りタイムでは、「あそび」の場面だけでなく、朝の登園の様子や「せいかつ」の時間の様子など、多面的に幼児一人一人の情報を共有し、同じ思いで幼児と関わるができるように保育の方向性を確認してきた。幼児との会話や表情などから読み取れる幼児の様子を共有することで、幼児の好きなものや楽しみが分かり、援助につなげていくことができたのではないかと考える。

また、入園後すぐに自分のやりたい遊びを見付け、遊び始める幼児がいる一方、園生活に慣れるのに時間がかかる幼児もいた。テラスや保育室で泣いている幼児もいれば、常に教師の近くにいて、一緒にいることで遊び出すことのできる幼児もいた。いずれも教師が幼児のありのままを受け入れて、「あなたのことを大

切に思っているよ」「やりたいことをやっていいんだよ」という心もちで幼児と関わることで、幼児は少しずつ幼稚園は安心して過ごせる場所であるという安心感を感じていったのではないかと捉えた。そして、その経験を1つ1つ積み重ねていくことで、教師との信頼関係が生まれてくるものとする。

<3歳クラス Ⅰ期 4月>「寄り添い、安心できる場所に」

これまでの保育の様子

これまでの生活経験や育ちが異なる3歳クラス児にとって、初めての附属幼稚園での園生活が始まった。入園式の日から、幼児一人一人の登園時の様子や「あそび」の時間の様子、「せいかつ」の時間の様子を担任・副担任で共有してきた。そして、幼児をまるごと受け入れ、とことん寄り添い、幼稚園が安心して過ごせる場所になることを第一に考え、援助していこうと話し合った¹⁾。

入園当初、母親と離れることに不安を感じ、泣いている幼児の姿が多く見られた。そのような場合、無理に母親と離そうとはせず²⁾に、母親にも保育室へ入ってもらい、幼児と一緒に朝の支度をしてもらった。そして、母親には幼児が支度をしている間に、様子を見ながらそっと保育室を出てもらうことにしていた。

入園式翌日、A児が支度を終えて外へ出ようとする、母親がいなくなっていることに気付き、泣き始めた。担任が「お母さん、トイレに行ったのかな。戻ってくるまで、遊んで待ってる？」と聞くと、うなづいて外に出た。しばらくすると、担任の所へやってきて、「ママが来るまで遊んでよ」と言って砂場で遊び始めた。その翌日は、朝の支度が終わると、保育室前のテラスでしくしく泣いていた。2日間の様子から、担任と副担任はA児が安心して遊び始められるように、A児は何が好きなのか、A児の心を動かすものが何なのかを探っていくことを確認した³⁾。

4月12日

A児が朝の仕度を終え、テラスに行く。外を見ながら泣いている。
A児：「ママがいい」
5歳クラス児：「どうしたの？」
A児：「ママがいい」
副担任：「ママがいいんだね」⁴⁾
5歳クラス児：「大丈夫だよ」
5歳クラス児はその場を離れ、お花やおタマジャクシを持ってくる。
5歳クラス児：「どうぞ」
副担任：「わあ、すてき」
副担任は、近くに担任が来たタイミングで、これまでの様子を伝える⁵⁾。
担任：「Aちゃん、これなあに？」
A児：「オタマジャクシ」
担任：「へえー。すごい。幼稚園には、オタマジャクシもいるんだね。どこにいるんだろう」
A児：「どこにいるの？」
5歳クラス児：「池にいるよ」

この日、テラスで大きな声をあげて泣いているA児の姿を見て、5歳クラス児がA児を心配して寄ってきた。そして、お花を摘んだり、オタマジャクシを茶碗に入れたりしたものを見せていた。その様子を副担任から聞いた担任は、A児がオタマジャクシをじっと見つめる様子から、もしかしたら、生き物や水に興味があるのではないかと捉えた。そこで、今後も継続して、A児の楽しみは何なのかを読み取っていこうと確認した⁶⁾。

コメントの追加 [y1]: 幼児を受け入れ、とことん寄り添うことに多くの共感が得られた。幼児に寄り添うことが幼児理解の土台になって、その後の保育につながっていくのだと考える。

コメントの追加 [y2]: A児に寄り添い、A児を理解しようとしていることに共感が得られた。A児自身を理解することがその後の援助につながり、A児が安心して過ごしたり、遊んだりする姿につながっていくと考える。

コメントの追加 [y3]: 継続してA児の理解に努めることへのコメントが多かった。幼児の思いや興味は時間とともに変化していく。常に幼児の思いを探り、読み取ることが幼児理解につながり、幼児を支えることにつながると考える。

¹⁾ 幼児一人一人に寄り添う保育、援助(b) 同じクラスを担当する教師同士が同じ方向を向いて保育することが重要(d) そのままを受け止め、安心して過ごせる土台の大切さ(f) 「とことん」これが安心感につながる(g) 幼児理解の第一歩(h)
²⁾ 幼児の実態に合わせて無理なく柔軟に対応することが大切(d) ゆっくり、一緒に、無理をしない(h)
³⁾ 幼児理解(b) 幼児理解がまずは土台となり、援助に結びつく(c) 幼児理解をもとにA児にとっての安心を考えている(e)
⁴⁾ 気持ちに共感している(d)
⁵⁾ 保育中の情報共有をすることで援助する保育者が変わっても継続した援助ができる(b) 幼児の様子を共有している(d)
⁶⁾ 幼児の思いを探る、読み取ることが遊びの援助につながる(b) 幼児の思いは更新されていくもの。継続した幼児理解が大切(c) とことん寄り添う援助(g) 泣く幼児に寄り添いながらも、願いや興味を探り、観察しようとする教師の姿(h)

4月14日

A児は「帰る！！」と言いながら、母親と登園する。母親と支度を済ませ、母親が帰ると保育室で泣いている。
A児：「帰りたい」
副担任：「じゃあ、帰ろうか」
A児は、副担任と靴を履き替え、外へ出る。登園で歩いた道を進んでいくが、フェンスのところまで行って、門が閉まっていることが分かる。
副担任：「お外行けないね。どうしようか」
A児：「幼稚園を壊す」
副担任：「そっかあ。幼稚園壊したいんだね。どうやって壊そうか」
A児：「これで壊す」
A児は水盤の水を流し始める。すると、地面の砂が流れ、土の部分が見える。
副担任：「あ、幼稚園壊れてきたよ」
A児：「やったー！」
副担任：「やったー！」
A児はその後水の流れ続ける。

コメントの追加 [y4]: どんな幼児の思いも受け入れ、肯定的に捉えていくことに多くの共感を得た。幼児の思いが実現できそうにない場合でも、否定的に捉えるのではなく、まずは受け止め、一緒に叶えようとすることで、幼児の安心感につながっていくと考える

A児はこの日も母親の姿が見えなくなると、保育室で大きな声で泣き始めた。担任・副担任とで、A児の思いを受け止め、とことん寄り添っていこうという心もちを共有していた⁸。副担任は、A児の「帰りたい」という思いに寄り添い、一緒に門のところまで行くことにした。副担任は、池の近くを通ったり、雨どい遊びをしている幼児の近くを通ったりして、A児が興味を示すものはないかを観察しながら歩いた⁹。そして、門のところまで来ると、A児の「幼稚園を壊したい」という思いもそのまま受け止めた。このことをきっかけに、水を使って遊ぶことに心ひかれたA児はこの後、土山の上から水を流し、山を壊す遊びを始めた。
A児のやりたい思いを大切に、それに寄り添った援助をすることで、A児は水を使った遊びに楽しみを感じているのではないかという理解につながった¹⁰。そして、A児が安心して遊び始められるように、水盤の近くにたらいを置いたり、日々のクラス新聞の中でA児の様子を意図的に掲載し、受け入れの際のA児との会話のきっかけにしたりしようと考えた¹¹。

コメントの追加 [y5]: 新聞を活用した援助やたらいを置くなどの環境構成に共感を得た。幼児が興味のある遊びに安心して向かえるようにすること、そのために幼児が使いたくするような道具を目の付くところに置くなどの環境構成は重要になってくると考える。

4月22日

担任：「おはよう。Aちゃん」
A児：「おはよう」
担任：「昨日のこれ、楽しかったね」クラス新聞の写真を見る。
A児：「うん。でも、今日はちょっと寒いね」
担任：「そうだね。今日はちょっと寒いね」
朝の支度を終えると、A児は水盤の水を勢いよく出している。
担任：「Aちゃん、何したいの？」
A児：「洗車してるんだよ」
担任：「あー、これ洗いたかったんだね」¹²
A児：「うん、そう。これよこれちゃったんだ」
担任：「そうだったんだね。ピカピカになると、うれしいね」
A児：「うん」
担任：「そうだ、ここにこんなものもあるよ」
A児：「これでごしごしすると、きれいになるね」

⁷ 実際には壊さないが、受け入れ共感する教師の姿勢(c)「壊すなんて乱暴な」と注意するのではなく、その気持ちもそのまま受け入れている(d) とことん寄り添う援助(g) 肯定的な捉え(h)

⁸ とことん寄り添う大切さ(f) 泣く幼児に寄り添いながらも、願いや興味を探り、観察しようとする姿(h)

⁹ 常に寄り添い続ける教師の姿(c) 歩きながら幼児理解や遊びのきっかけを探っている(e)

¹⁰ 幼児のしていることを肯定的に捉える大切さ(e) やりたい思いを大切に寄り添った援助から見えてきた遊び(f)

¹¹ 環境構成・新聞による視覚的援助・たらいを置くなど遊びにつながる道具を使った援助(b) 環境構成のわずかな違いが幼児の遊びを変える(c) 思い出す、安心する、やってみようと思うことが大切(g) 遊びを生み出す環境構成(h)

¹² この言葉がけでやりたいことを試そうとできる(g)

担任：「わあ、本当だ。きれいになってきたね」

A児は朝登園すると、水盤に向かうことが多くなり、たらいを使った水浴びをするなど、水を使った遊びに興味に向いていることを担任と副担任で共有してきた。この日は水道の蛇口を3人乗りのバギーに向け、勢いよく水を出していた。A児が自らバギーを持ってきて、水を使って洗車をしていることに驚きながらも、自ら遊び始めていることにうれしくなった¹³。そして、そのやりたい思いを支えたいと願い、たわしがあることを伝えた¹⁴。そのことで、タイヤや座面を磨くなどさらに遊びが続いていった。担任はうれしそうに洗車をするA児に共感し、一緒に洗車を楽しんだ¹⁵。

自らバギーを運び、洗車しているA児の姿を見て、幼児の思いに寄り添うことが、安心して自分のやりたいことを見付けて、やってみようとする姿につながるのではないと考えた¹⁶。

考察

幼稚園生活のスタートであるⅠ期。どの幼児にとっても幼稚園が安心できる場所、そして楽しく遊ぶことができる場所になることを願って、まずは幼児一人一人のことをよく知り、そのうえで幼児の思いに寄り添うことを大切にしてきた。日々の振り返りタイムでは、「あそび」の場面だけでなく、朝の登園の様子や「せいかつ」の時間の様子など、多面的に幼児一人一人の情報を共有し、同じ思いで幼児とかかわることができるように保育の方向性を確認してきた¹⁷。幼児との会話や表情などから読み取れる幼児の様子を共有することで、幼児の好きなものや楽しみが分かり、援助につなげていくことができたのではないかと考える。

また、入園後すぐに自分のやりたい遊びを見付け、遊び始める幼児がいる一方、園生活に慣れるのに時間がかかる幼児もいた。テラスや保育室で泣いている幼児もいれば、常に教師の近くにおいて、一緒にいることで遊び出すことのできる幼児もいた。いずれも教師が幼児のありのままを受け入れて、「あなたのことを大切に思っているよ」「やりたいことをやっていいんだよ」という心もちで幼児と関わることで、幼児は少しずつ幼稚園は安心して過ごせる場所であるという安心感を感じていったのではないかと捉えた。そして、その経験を1つ1つ積み重ねていくことで、教師との信頼関係が生まれてくるものと考えた¹⁸。

コメントの追加 [y6]: 振り返りタイムでの情報共有についてのコメントが多かった。幼児を様々な面から理解し、幼児にかかわる教師が共通認識をもって保育に向かうことが大切だと考える。

コメントの追加 [y7]: 安心感に関して、多くの共感を得た。幼稚園生活においては安心感が何よりも大切で、様々な活動の土台になっている。幼児理解が幼児の安心感につながり、その積み重ねが信頼関係につながっていく。幼児をより深く理解し、その思いに寄り添った援助をすることで、幼児は幼稚園で安心して遊んだり、生活したりすることができるようになると思う。

¹³ 素直な喜び(h)

¹⁴ 願いをもって援助している(c)

¹⁵ 教師と一緒に遊びながら自由に使える道具を知っていくことも安心へつながる援助となる(e)

¹⁶ 幼児のどんな姿も受け止め、安心して過ごせる場をつくらうとしている教師の姿が素敵(d) 安心して過ごす土台ができたことにより、主体的に遊び始めることができる(f)

¹⁷ 幼児理解と情報共有によって同じ方向を向いて保育できるようにしている(b) 生活全てを幼児の遊び(学び)につなげようとしている(c) 幼児理解の大切さ(f) 多面的な幼児理解の大切さ(h)

¹⁸ 日々、コツコツと積み重ねた信頼関係(h) やりたいことができるという安心感は今後の遊びの主体性につながる(c) 受け止めてもらえる、否定されないという実感が安心して過ごすことにつながる(e) 「安心」「あるがまま」の土台を大切にしてい、そこからスタート(f) 教師への大きな信頼と安心感を寄せている。Ⅰ期の教師の心もちや日々の取組が生きている(h)

＜3歳クラス II期 6・7月＞「寄り添い、遊びを支える」

これまでの保育の様子

I期では、幼児にとって幼稚園が安心できる場所になるように、幼児一人一人に寄り添い、援助してきた。そして、II期でもその安心感を土台として、幼児が思い思いの遊びに夢中になれるように援助していこうと担任・副担任で確認した。徐々に幼稚園の生活に慣れてきた幼児は、砂場での料理づくりや雨どい遊び、水を使った遊びなど幼稚園の様々なものに興味を示すようになってきた。中でも、幼稚園の生き物に興味を示す幼児が増えてきた。教師は、幼児と一緒に園庭や園舎裏を散策しながら、草花や虫などのかかわりにどんな楽しみを見出すのかを見守っていくことにした。

6月、毎日のように園庭やグラウンドで毛虫探しをしていた3歳クラス児。ある日、B児がグラウンドでバッタを捕まえた。その様子を見ていた他の幼児もバッタ探しに興味をもち、バッタ探しが朝のルーティンのようにになっていた。

6月20日

C児：「捕まえた！」
教師：「すごい！Cちゃん、自分で捕まえたの？」
C児：「うん！」
教師：「やったね！」
C児：「袋に入りたい」
教師：「分かったよ。どの袋にする？」チャック付きの袋、透明のビニール袋、白色の持ち手のあるビニール袋の3種類を見せる。
C児：「これにする」チャック付きの袋を選び、中にバッタを入れる。
C児：「よく見える」
教師：「そうだね。顔がよく見えるね。」C児は教師とチャック付きの袋に入れたバッタを見つめる。
B児：「それじゃあ、バッタがつぶれちゃうよ」
C児：「じゃあ、チャックしめないでおく」
B児：「でもつぶれちゃうよ」
C児：「うーん」
教師：「これなら、ふんわりもできるよ」透明のビニール袋に空気を入れて見せる。
C児：「本当だ。それがいい」透明のビニール袋にバッタを入れ替える。

これまでC児は、他の幼児が虫捕まえをしても、近くで見ているだけで、自分では捕まえようとはしなかった。そのC児が、B児がバッタを捕まえるのを目にしたことをきっかけに、自分もやってみたいと思うようになり、バッタ捕まえを試すようになってきた。そしてこの日、初めて自分でバッタを捕まえた。教師は、初めて自分でバッタを捕まえ、興奮気味のC児の思いに共感し、一緒に喜んだ。そして、袋が欲しいというC児の思いを聞き、C児のイメージに合うものを選んで欲しいと願い、3種類の袋を提示した。チャック付きの袋を希望したC児は、袋にバッタを入れ、バッタの様子を見つめていた。教師は、C児の思いに寄り添い、チャック付きの袋を渡した。チャック付きの袋に入れたことによって、バッタの顔や足の様子など細かいところに目がいき、あまり虫が得意ではないC児がバッタを身近に感じるにはよかったのではないかと捉えた。しかし、その様子を見ていたB児がC児にその袋ではバッタがつぶれてしまうと助言した。この言葉をきっかけに、C児は先程提示した3種類の袋を見比べ、考え始める。教師は、つぶれないようにしたいというC児の思いを読み取り、「これなら、ふんわりもできるよ」と言葉をかけた。すると、C児の表情は明るくなり、「それがいい」とバッタを入れ替えた。

初めにチャック付きの袋を選んだC児は、初めて捕まえた大切なバッタを逃がしたくないと思い、チャック付きの袋を選んだのではないかと捉えた。教師がその思いに寄り添うことで、C児は満足しているようだったが、B児からの助言によって、大切なバッタをつぶさないようにしたいという思いも出てきたのであろう。幼児の思いはその場の状況や他の幼児とのかかわりなどから、随時更新されていく。教師は、その場の幼児の思いの変化を読み取り、援助していくことが大切だと考え、その方向性を副担任と共有した。

6月20日

C児：「バッタにエサあげたいんだけど、何食べるのかな？」

教師：「うーん。何食べるんだろうね」

C児：「おうちにはバッタの図鑑があるんだけどな」

教師：「そっか。幼稚園にもあるのかな？」

C児：「絵本のところにあるかも！」教師の手をひき、園舎内の絵本コーナーへ行く。

C児：「ここなら、あるかもしれないよ」

教師：「そうだね。さがしてみようか」

C児：「あ、これバッタがいる」

教師：「本当だ。何食べるんだろうね」

C児：「バッタさん、長い草食べてる」

教師：「へえー。草食べるんだね」

初めてバッタを捕まえたその日、C児はしばらくすると園庭から保育室へ戻ってきて、バッタにエサをあげたいとつぶやく。教師は、バッタに興味を示しているC児のつぶやきをうれしく思い、C児の思いを聞くことにした。教師は、C児が図鑑でバッタのエサを調べたいのではないかと読み取り、C児に幼稚園にも図鑑があるのかと問いかけた。すると、これまでの経験から園舎内の絵本コーナーにあるのではないかと考えたC児はすごい勢いで絵本コーナーに向かった。絵本コーナーにはたくさんの本が並んでいるため、教師はさりげなく、バッタが載っているような図鑑を目のつくところに置いた。C児はそれに気づき、バッタのページを探し、眺め始めた。そして、バッタが草を食べているイラストを見付け、うれしそうに園庭に戻っていった。

振り返りタイムでは、C児が初めて自分でバッタを捕まえたこの日の出来事は、C児にとって自信につながる大きな出来事と捉え、今後もC児が安心してバッタとかかわれるように、C児の思いに寄り添っていきこうと援助の方向性を確認した。そして朝の受け入れの際には、テラスの机の位置を工夫し、捕まえたバッタや図鑑がC児の目線に入りやすいようにし、C児のバッタとのかかわりが続くように願った。

7月7日

C児がグラウンドでバッタを捕まえる。

C児：「先生、長い草見付けて」

教師：「何するの？」

C児：「バッタにあげるの」

教師：「へえ、バッタさん喜ぶの？」

C児：「バッタは長い草を食べるんだよ」

教師：「そうだったね。Cちゃん、図鑑で見付けたもんね」

C児：「うん！」

教師：「先生もお手伝いするね。これはどうかな？」

C児：「いいね、いいね。これもいいかな」

バッタのエサについて図鑑を見た日から3週間近く経っていた。それまで、バッタ捕まえは継続していたものの、バッタのエサを集めたりする様子は見られなかった。しかし教師は、今のC児にとっての楽しみは、バッタを捕まえることであって、エサをあげることではないのではないかと捉え、C児が思う存分バッタ捕まえを楽しめるように援助していくことにしていた。これまで、毎日のようにバッタ捕まえを楽しんでいたC児。副担任とは、C児がバッタ捕まえに夢中になっている様子を確認し合い、教師も時には一緒にバッタ捕まえを楽しむようにしてきた。

この日もC児は他の幼児や教師と一緒にバッタ捕まえを楽しんでいた。しばらくすると、C児が教師の元へやってきて、長い草を見付けて欲しいと話す。教師は以前、図鑑を見て長い草を食べることを知り、喜んでいたC児の姿を思い出し、一緒にエサ集めをすることにした。C児はその場に生えていた草をよく見て、「これはいいな」などつぶやきながらとり、ビニール袋に入れていた。C児のバッタを大切にしたいという思いが伝わってきた。C児の「やりたい」思いを大切にしながら、C児とバッタとのかかわりを見守ることで、C児がバッタ捕まえに満足し、バッタとの次のかかわり方を見いだしていったと考えられる。

7月21日

C児は園舎裏で散策中、バッタが飛ぶ様子を見る。

C児：「すごーい！！」

教師：「すごーい！！」2人で目を合わせる。

C児：「バッタが飛んだよ」

教師：「本当だね」

C児：「ねえ、ねえ、図鑑見てみよう」

教師：「図鑑で何が见たいの？」

C児：「バッタが飛ぶところ」

教師：「そっか。あるといいね。行ってみる？」2人で園舎内の絵本コーナーで図鑑を見る。

C児：「これだー！すごーい！あったー！」

教師：「本当だ。あったね。」

C児：「バッタって飛ぶんだね」

教師：「そうだね。」

C児：「羽があるんだね」

教師：「本当だ」

C児：「これ、木のところに持って行こう」

教師：「いいよ。持って行ってどうするの？」

C児：「バッタがいたら、すぐに見れるように」

教師：「いいね、いいね！」園舎裏に図鑑を持って行く。

この日、C児は他の幼児や教師と園舎裏を散策していた。すると、木の陰に大きなバッタを見付けた。教師とC児がそのバッタを見つめていると、バッタが羽を広げ、飛んでいったのである。その光景を見て、C児と教師は目が合い、「すごーい！」と声がそろった。一瞬の出来事であったが、バッタが羽を広げて飛ぶ様子を見た驚きや感動、その感動を教師と一緒に共有できた喜びでC児は興奮状態だった。すると、C児は図鑑を見たいと言い、園舎内の絵本コーナーまで小走りで向かった。教師は、以前C児が見ていた図鑑を見付け、そっとC児の目の届くところに置いた。C児はその図鑑を見付けると、バッタのページを開き、「あったー！」と喜んだ。図鑑のイラストを見て、バッタが本当に飛ぶこと、バッタには羽があることに気付いたC児は、バッタへの親しみがさらに深まったのではないかと捉えた。さらに、その図鑑を園舎裏まで持って行き、その後もバッタ探しを楽しんだ。園舎裏では、バッタには様々な種類があること、かむバッタとかまないバッタがいることなど、C児は図鑑を見ながら語っていた。

教師は、C児が「バッタが飛ぶ様子をもう1度見たい」「本当に飛ぶのか確かめたい」という思いをもったのではないかと読み取り、C児の思いに寄り添った。教師はC児と一緒に園舎内の絵本コーナーに行き、一緒に図鑑を見た。C児は「教師と一緒に」という安心感から、自分の「やりたい」思いを表現することにつながったのではないかと考える。幼児は安心感があるからこそ、自分の思いを表現したり、「やりたい」を試したりすることができるのではないかと考える。

考察

幼児の思いをよく聞き、幼児がやりたいことを尊重することで、幼児は満足感を得ることにつながり、安心して遊びを継続することができる。C児も自らバッタ捕まえを試し、何週間も継続的にバッタ探しを楽しんでいた。自分でバッタを捕まえられるようになったことがC児の自信になり、その後のC児の遊びを支えていたのだろう。さらにC児が自分の思うようにバッタを捕まえていくことを教師が受け入れ、その思いに共感してきたことで、C児はその後も安心してバッタ捕まえに夢中になっていったと考えられる。

また、教師が幼児の思いを大切にし、その思いに寄り添うことで、幼児は安心して自分の思いを表現したり、「やりたい」を試したりできるのではないか。教師と一緒に時間を過ごす中で、C児の思いをよく聞き、その思いを大切にしてきたことで、C児は自分の思いを伝えても大丈夫と安心し、「図鑑を見たい」「バッタのエサを集めたい」「図鑑を外に持って行きたい」などと、教師に話をすることができ、「やりたい」を試す姿につながったと考える。今後も、そのとき、その場での幼児の言葉や表情、しぐさから幼児の思いを読み取り、それに寄り添った援助で幼児を支えていきたい。

<3歳クラス II期 6・7月>「寄り添い、遊びを支える」

これまでの保育の様子

I期では、幼児にとって幼稚園が安心できる場所になるように、幼児一人一人に寄り添い、援助してきた。そして、II期でもその安心感を土台として、幼児が思い思いの遊びに夢中になれるように援助していこうと担任・副担任で確認した。¹徐々に幼稚園の生活に慣れてきた幼児は、砂場での料理づくりや雨どい遊び、水を使った遊びなど幼稚園の様々なものに興味を示すようになってきた。²中でも、幼稚園の生き物に興味を示す幼児が増えてきた。教師は、幼児と一緒に園庭や園舎裏を散策しながら、草花や虫などのかかわりにどんな楽しみを見出すのかを見守っていくことにした。³

6月、毎日のように園庭やグラウンドで毛虫探しをしていた3歳クラス児。ある日、B児がグラウンドでバッタを捕まえた。その様子を見ていた他の幼児もバッタ探しに興味をもち、バッタ探しが朝のルーティンのようにになっていた。

6月20日

C児：「捕まえた！」
教師：「すごーい！Cちゃん、自分で捕まえたの？」
C児：「うん！」
教師：「やったね！」
C児：「袋に入りたい」
教師：「分かったよ。こんな袋があるよ」チャック付きの袋、透明のビニール袋、白色の持ち手のあるビニール袋の3種類を見せる。⁴
C児：「これにする」チャック付きの袋を選び、中にバッタを入れる。
C児：「よく見える」
教師：「そうだね。顔がよく見えるね」
C児は教師とチャック付きの袋に入れたバッタを見つめる。
B児：「それじゃあ、バッタがつぶれちゃうよ」
C児：「じゃあ、チャックしめないで」
B児：「でもつぶれちゃうよ」
C児：「うーん」
教師：「これなら、ふんわりもできるよ」透明のビニール袋に空気を入れて見せる。
C児：「本当だ。それがいい」透明のビニール袋にバッタを入れ替える。

これまでC児は、他の幼児が虫捕まえをしていても、近くで見ているだけで、自分では捕まえようとはしなかった。そのC児が、B児がバッタを捕まえるのを目にしたことをきっかけに、自分もやってみたいと思うようになり、バッタ捕まえを試すようになってきた。そしてこの日、初めて自分でバッタを捕まえた。教師は、初めて自分でバッタを捕まえ、興奮気味のC児の思いに共感し、一緒に喜んだ。⁵そして、袋が欲しいというC児の思いを聞き、C児のイメージに合うものを選んで欲しいと願い、3種類の袋を提示した。⁶チャック付きの袋を希望したC児は、袋にバッタを入れ、バッタの様子を見つめていた。教師は、C児の思いに寄り添い、チャック付きの袋を渡した。チャック付きの袋に入れたことによって、バッタの顔や足の様子など細かいところに目がいき、あまり虫が得意ではないC児がバッタを身近に感じるにはよかったのではないかと捉えた。しかし、その様子を見ていたB児がC児にその袋ではバッタがつぶれてしまうと助言した。この言葉をきっかけに、C児は先程提示した3種類の袋を見比べ、考え始める。教師は、つぶれないようにし

コメントの追加 [y1]：「安心感」に関して共感が得られた。園生活のスタートでもある3歳クラス児にとっては安心感が何よりも大切で、安心感の上に遊びや生活が成り立っていると考える。今後も安心感を土台にして、幼児の育ちを支えていきたい。

¹ 園生活が初めての3歳クラス児にとって安心できる場所をつくることは何よりも大切(d) 「安心」という土台が大切なスタート(f) 「安心感が土台」安心感が大前提(h)

² これまでに幼児理解をもとに援助や環境構成を積み重ねてきた成果(c)

³ 幼児が何に楽しみを見出しているのかを同じ目線で過ごすことが大切(d) 常に幼児を理解しようとする姿勢で保育を行っている(e)

⁴ 教師がいくつか選択肢を提示することで、幼児自身が決定することができる(b) 幼児が自分の意図に沿うものを選ぶように教材を準備している(d)

⁵ 安心感につながる(c) 幼児の思いに寄り添うことが自己肯定感につながる(e)

⁶ 袋にもいろいろある。大人の思い込みで1つに限定しない方がよい(h)

たいというC児の思いを読み取り、「これなら、ふんわりもできるよ」と言葉をかけた。⁸⁾すると、C児の表情は明るくなり、「それがいい」とバツタを入れ替えた。

初めにチャック付きの袋を選んだC児は、初めて捕まえた大切なバツタを逃がしたくないと思い、チャック付きの袋を選んだのではないかと捉えた。教師がその思いに寄り添うことで、C児は満足しているようだったが、B児からの助言によって、大切なバツタをつぶさないようにしたいという思いも出てきたのであろう。⁹⁾幼児の思いはその場の状況や他の幼児とのかかわりなどから、随時更新されていく。教師は、その場の幼児の思いの変化を読み取り、援助していくことが大切だと考え、その方向性を副担任と共有した。¹⁰⁾

6月20日

C児:「バツタにエサあげたいんだけど、何食べるのかな?」

教師:「うーん。何食べるんだろうね」

C児:「おうちにはバツタの図鑑があるんだけどな」

教師:「そっか。幼稚園にもあるのかな?」⁷⁾

C児:「絵本のところにあるかも!」教師の手をひき、園舎内の絵本コーナーへ行く。

C児:「ここなら、あるかもしれないよ」

教師:「そうだね。さがしてみようか」

C児:「あ、これバツタがいる」

教師:「本当だ。何食べるんだろうね」

C児:「バツタさん、長い草食べてる」

教師:「へー。草食べるんだね」

初めてバツタを捕まえたその日、C児はしばらくすると園庭から保育室へ戻ってきて、バツタにエサをあげたいとつぶやく。⁸⁾教師は、バツタに興味を示しているC児のつぶやきをうれしく思い、¹⁰⁾C児の思いを聞くことにした。教師は、C児が図鑑でバツタのエサを調べたいのではないかと読み取り、C児に幼稚園にも図鑑があるのかと問いかけた。¹¹⁾すると、これまでの経験から園舎内の絵本コーナーにあるのではないかと考えたC児はすごい勢いで絵本コーナーに向かった。¹²⁾絵本コーナーにはたくさんの本が並んでいるため、教師はさりげなく、バツタが載っているような図鑑を目のつくところに置いた。¹³⁾C児はそれに気づき、バツタのページを探し、眺め始めた。そして、バツタが草を食べているイラストを見付け、うれしそうに園庭に戻っていった。

振り返りタイムでは、C児が初めて自分でバツタを捕まえたこの日の出来事は、C児にとって自信につながる大きな出来事と捉え、今後もC児が安心してバツタとかかわれるように、C児の思いに寄り添っていこうと援助の方向性を確認した。¹⁴⁾そして朝の受け入れの際には、テラスの机の位置を工夫し、捕まえたバツタや図鑑がC児の目線に入りやすいようにし、C児のバツタとのかかわりが続くように願った。¹⁴⁾

7月7日

C児がグラウンドでバツタを捕まえる。

C児:「先生、長い草見付けて」

コメントの追加 [y2]: 幼児の思いの読み取りに関して共感を得た。教師が幼児をより理解し、幼児の思いに寄り添うことで、信頼関係が築くことができる。すると、幼児は教師の言葉に耳を傾け、新しい考えに出会うことができるようになる。

コメントの追加 [y3]: 随時更新されていく幼児の思いに対応していくことに関して多くの共感を得た。日々の保育の中では、計画した援助の方向性も念頭に置きながら、目の前の幼児の変化を見逃さず、幼児の思いに寄り添った援助が大切だと改めて確認した。また、それを担任・副担任などと共有し、同じ心もちで援助していくことが大切だと考える。

コメントの追加 [y4]: さりげなく幼児の思いを継続させようとする援助に共感を得た。幼児の思いが冷めないように、そして幼児の興味が持続するようにと願った援助であるが、手を出し過ぎず、幼児の「自分で」する姿を大切にしながら、適度な距離を保って援助していくことのバランスが大切だと考えた。

コメントの追加 [y5]: 幼児にとっての体験の価値やその意味を共有することの大切さに共感を得た。幼児にとって、その体験がどのような意味をもつのかを捉え、共有することで、その後の援助の方向性が見えてくると考える。

コメントの追加 [y6]: 幼児の思いや遊びを継続させるための環境構成に多くの共感を得た。幼児の目線に立って環境構成を更新することで、幼児の思いや遊びが持続していくのではないかと考える。

⁷⁾ 幼児の思いに寄り添った言葉かけ(b) さりげなく袋の違いを伝えることで幼児に新しい考えを加えている(d) 幼児理解がベースにあり、遊びの経過や幼児同士のやりとりなどをよく見取っているからこそその言葉かけ(g)

⁸⁾ 担任と副担任の情報共有(b) 計画や振り返り通りではなくても、目の前の子どもの思いから援助を考えている(c) 日々成長と共に変化する幼児の心の動きに沿うことは大切(d) 幼児の心の動きを捉えてよりよい援助を考えていくことが大切(e) 幼児の思いに寄り添った援助(f) ころころ変わるのも子ども。一方で、変わらない、継続していく思いもある(h)

⁹⁾ 幼児と絵本コーナーをつなげる言葉かけ(d) 一瞬途絶えそうになる思いを園でも可能だと、引き戻す言葉かけ(h)

¹⁰⁾ 幼児の育ちに心を動かす教師の姿。長期的な育ちを捉えている(c) 幼児が興味を広げていく姿は嬉しい(d)

¹¹⁾ 幼児自身が「ある!知ってる!」と気付くことで、主体性がより発揮されている(d)

¹²⁾ さりげない援助、やりすぎない援助である(b) まだうまく字が読めないであろう3歳クラス児にとっては必要な援助(d) 本を渡すのではなく、そっと置いておく援助(f) すごい勢いで絵本コーナーに向かった気持ちが続いてしまわないように、本に目が向くような動かしている。思いを後押しする援助(g) 拡散しような思いを焦点化させるような働きかけ(h)

¹³⁾ 担任・副担任の共有が大切(d) 幼児にとって、どのような意味のある体験だったかを捉えることが次の援助につながる(e) 思いに寄り添い、幼児の自信につながる援助(f)

¹⁴⁾ 遊びが持続するように願った環境構成(b) 幼児の目線に立って支える。わずかな環境構成の変化が遊びの継続につながる(c) 興味が長く続いたのは、教師による環境構成の成果ではないか(d) 遊びの継続につながる援助(f) 思いを継続させるための働きかけ(h)

教師：「何するの？」
C児：「バッタにあげるの」
教師：「へえ、バッタさん喜ぶの？」
C児：「バッタは長い草を食べるんだよ」
教師：「そうだったね。Cちゃん、図鑑で見付けたもんね」
C児：「うん！」
教師：「先生もお手伝いするね。これはどうかな？」
C児：「いいね、いいね。これもいいかな」

バッタのエサについて図鑑を見た日から3週間近く経っていた。それまで、バッタ捕まえては継続していたものの、バッタのエサを集めたりする様子は見られなかった。しかし教師は、今のC児にとっての楽しみは、バッタを捕まえることであって、エサをあげるのではないのではないかと捉え、C児が思う存分バッタ捕まえて楽しめるように援助していくことにしていた。¹⁵これまで、毎日のようにバッタ捕まえて楽しんでいたC児。副担任とは、C児がバッタ捕まえて夢中になっている様子を確認し合い、教師も時には一緒にバッタ捕まえて楽しむようにしてきた。

この日もC児は他の幼児や教師と一緒にバッタ捕まえて楽しんでいて、しばらくすると、C児が教師の元へやってきて、長い草を見付けて欲しいと話す。教師は以前、図鑑を見て長い草を食べることを知り、喜んでいてC児の姿を思い出して、一緒にエサ集めをすることにした。¹⁶C児はその場に生えていた草をよく見て、「これはいいな」などつぶやきながらとり、ビニール袋に入れていた。C児のバッタを大切にしたいという思いが伝わってきた。C児の「やりたい」思いを大切にしながら、C児とバッタとのかかわりを見守ることで、C児がバッタ捕まえて満足し、バッタとの次のかかわり方を見いだしていったと考えられる。¹⁷

コメントの追加 [y7]: 幼児の思いに寄り添い、その思いを大切にしようとする心もちに多くの共感を得た。教師は期待する幼児の姿を思い描くことは大切だが、それにとらわれず、目の前の幼児の姿から幼児の思いを読み取り、柔軟に援助の方向を修正していくことも大切だと考える。

7月21日

C児は園舎裏で散策中、バッタが飛ぶ様子を見る。
C児：「すごーい！！」
教師：「すごーい！！」
2人で目を合わせる。
C児：「バッタが飛んだよ」
教師：「本当だね」
C児：「ねえ、ねえ、図鑑見てみよう」
教師：「図鑑で何が见たいの？」
C児：「バッタが飛ぶところ」
教師：「そっか。あるといいね。行ってみる？」2人で園舎内の絵本コーナーで図鑑を見る。
C児：「これだー！すごーい！あつたー！」
教師：「本当だ。あつたね。」
C児：「バッタって飛ぶんだね」
教師：「そうだね。」
C児：「羽があるんだね」
教師：「本当だ」
C児：「これ、木のところに持って行こう」
教師：「いいよ。持って行ってどうするの？」
C児：「バッタがいたら、すぐに見れるように」
教師：「いいね、いいね！」¹⁸園舎裏に図鑑を持って行く。

¹⁵ 幼児の思いに寄り添い、「やりたい」「楽しい」を充分に感じ楽しめる援助(b) 目の前のC児の思いを捉え、援助につなげている(c) 幼児が何に楽しみを見出しているのかを過去にとらわれずに考えることは大切(d) 同じ遊びでも、楽しみ方、思いは違う。その思いに寄り添う援助(f) 幼児理解、教師の願いからこのような捉えができた(g)

¹⁶ 一人一人、幼児の遊びの経過をよく理解しているからこそ思い浮かぶ捉え(g) 根気よくC児に寄り添っていたからこそできる担任の働きかけ(h)

¹⁷ 見守ることで、自分でバッタとのかかわりを考えるC児の姿につながっている(c)

¹⁸ 幼児の反応に称賛や共感、承認している教師の姿(d) 短い相づちの中に、教師がともに感動している姿や強い共感の心もちでいることがうかがえる(h)

この日、C児は他の幼児や教師と園舎裏を散策していた。すると、木の陰に大きなバッタを見付けた。教師とC児がそのバッタを見つめていると、バッタが羽を広げ、飛んでいったのである。その光景を見て、C児と教師は目が合い、「すごーい！」と声がそろった¹⁹。一瞬の出来事であったが、バッタが羽を広げて飛ぶ様子を見た驚きや感動、その感動を教師と一緒に共有できた喜びでC児は興奮状態だった。²⁰すると、C児は図鑑を見たいと言い、園舎内の絵本コーナーまで小走りで行った。教師は、以前C児が見ていた図鑑を見付け、そっとC児の目の届くところに置いた。C児はその図鑑を見付けると、バッタのページを開き、「あったー！」と喜んだ。²¹図鑑のイラストを見て、バッタが本当に飛ぶこと、バッタには羽があることに気付いたC児は、バッタへの親しみがさらに深まったのではないかと捉えた。さらに、その図鑑を園舎裏まで持って行き、²²その後もバッタ探しを楽しんだ。園舎裏では、バッタには様々な種類があること、かみバッタとかまないバッタがいることなど、C児は図鑑を見ながら語っていた。

教師は、C児が「バッタが飛ぶ様子をもう1度見たい」「本当に飛ぶのか確かめたい」という思いをもったのではないかと読み取り、C児の思いに寄り添った。教師はC児と一緒に園舎内の絵本コーナーに行き、一緒に図鑑を見た。C児は「教師と一緒に」という安心感から、自分の「やりたい」思いを表現することにつながったのではないかと考える。幼児は安心感があるからこそ、自分の思いを表現したり、「やりたい」を試したりすることができるのではないかと考える。²³

考察

幼児の思いをよく聞き、幼児がやりたいことを尊重することで、幼児は満足感を得ることにつながり、安心して遊びを継続することができる。²⁴C児も自らバッタ捕まえを試し、何週間も継続的にバッタ探しを楽しんでいた。自分でバッタを捕まえられるようになったことがC児の自信になり、その後のC児の遊びを支えていたのだろう。さらにC児が自分の思うようにバッタを捕まえていくことを教師が受け入れ、その思いに共感してきたことで、C児はその後安心してバッタ捕まえに夢中になっていったと考えられる。²⁵

また、教師が幼児の思いを大切にし、その思いに寄り添うことで、幼児は安心して自分の思いを表現したり、「やりたい」を試したりできるのではないかと考える。教師と一緒に時間を過ごす中で、C児の思いをよく聞き、その思いを大切にしてきたことで、C児は自分の思いを伝えても大丈夫と安心し、「図鑑を見たい」「バッタのエサを集めたい」「図鑑を外に持って行きたい」などと、教師に話をすることができ、「やりたい」を試す姿につながったと考える。²⁶今後も、そのとき、その場での幼児の言葉や表情、しぐさから幼児の思いを読み取り、それに寄り添った援助で幼児を支えていきたい。²⁷

コメントの追加 [y8]: 安心感を土台にした援助に多くの共感を得た。幼児にとって教師が安心する存在になることで、幼児が自分のやりたいことを試すことができたり、自分の思いを素直に表現したりすることができるのではないかと考える。

コメントの追加 [y9]: 肯定的に幼児を理解し、それを援助につなげていくことの大切さに多くの共感を得た。幼児の思いを様々な側面から捉えることで、多様な援助を想定し、そのときの幼児に寄り添った援助を選択していくことが大切だと考える。

¹⁹ 幼児の思いに寄り添って過ごしているからこそ生まれた感動や驚きの共有(b)

²⁰ 幼児と教師の感動が重なったことでより大きな体験になったのではないかと(d)

²¹ 幼児が自分で見付ける体験があることでより自分の体験という印象がつく(d) 図鑑を使えることがしっかりと「残っている」(e)

²² 幼児が読みたいところで読む環境をつくることで「もっと知りたい」が強くなっている(d) 図鑑を外に持ち出すことができる環境がC児のやりたい思いを支えている(e)

²³ これまでの保育の積み重ねが自信をもった姿につながっている(e) 「学びの土台は安心感」ということがとてもよく分かる事例(d) 安心感という土台があるから遊びが広がっていく(f) 教師がともに感動し、寄り添っていたからこそ、バッタへの気付きや感動をさらに深めることができたのではないかと(h)

²⁴ 本当にそのとおり。また、その教師の思いが幼児にしっかりと伝わっているからこそ(d)

²⁵ 幼児主体の保育が安心感につながり、幼児は遊びに夢中になれる(b)

²⁶ 思いを受け止めてもらった体験の積み重ねが安心感と主体性の発揮につながっている(e)

²⁷ 幼児理解を日々更新していくことが大切(b) 振り返りでの方向性とその場の読み取り、どちらも大切にすることが質の高い保育につながる(c) 幼児の言葉や行動を肯定的に捉え、理解を深めていきたい(d) 「安心」を土台にし、寄り添うことで遊びの意欲につながる(f)

＜3歳クラス Ⅲ期 10・11月＞「遊びに加わり、幼児の思いを支える」

これまでの保育の様子

夏休みが明けて、バッタやカマキリを捕まえたり、ドングリを集めたりして、自分の楽しみを見付け、楽しむ様子が見られた。また、複数の幼児と一緒に雨どいを組んで水を流したり、料理屋さんになりきって遊んだりする姿も見られるようになってきた。「そっち持ってくれない」「砂もってきて」などと友達とかかわりながら、遊んでいる場面もあった。振り返りでは、幼児のやりたい思いを大切にしながら、友達と同じ場で同じ遊びを楽しめるように援助していこうと確認した。

10月、4歳クラスと一緒に緑の小道「こどもひろば」へ出かけた。初めは、遊具で遊ぶ幼児が多かったが、次第に遊具付近の自然物に興味をもち、木の枝や葉っぱを集めて遊ぶ幼児が出てきた。

10月21日「みんなの時間」

拾った木の枝で近くに横たわる丸太や竹をたたく。

担任：「いい音がするね」

D児：「うん。こっちは違う音がするよ！」

担任：「本当だ。おもしろい」

E児：「バイオリンもあるよ」

担任：「わあ、すごいね。いい音が聞こえる」

F児：「演奏会ですよ」

担任：「演奏会、いいね」

F児が歌を口ずさみながら、丸太をたたく。

担任：「どんぐりころころ……♪」

E児：「次は、『きらきらぼし』ね」

F児：「いいね、そうしよう」

担任：「きらきらひかる……♪」

D児たちは、歌に合わせて、木や竹をたたく。

F児：「これ、幼稚園に持っていきたい」

副担任：「幼稚園でどうしたいの」

F児：「また演奏会やりたいの」

副担任：「そうか、いいね。どうやって持って行こうか」

G児：「ぼく、持てるよ」

木の枝を持っていろいろな物をたたき始めた数名の幼児。しばらくすると、たたく物によって、違う音が聞こえることに気付いたD児は、勢いよく担任に伝えた。E児は弓なりになっている木の枝を見付け、それをバイオリンに見立て、弾く格好をして見せた。担任は、幼児一人一人がそれぞれのイメージで音遊びを楽しんでいると読み取り、共感した。すると、F児が「演奏会ですよ」と声をかけ、丸太をたたき始めた。すると、その場にいた他の幼児も丸太や竹の近くに集まり、木の枝でたたき始めた。F児は聞き覚えのない歌を口ずさんでいるように聞こえたが、すぐに聞こえなくなった。担任はこのF児の「演奏会」という言葉で、それまで思い思いの音遊びを楽しんでいた幼児の遊びのイメージが共有されたように感じた。F児の歌が終わった後も、イメージを共有して遊ぶ経験につながるかもしれないと考え、『どんぐりころころ』の歌を口ずさんでみた。その場にいた幼児数名が曲に合わせて丸太や竹をたたき始めた。その後も「次は、『きらきらぼし』ね」などと、幼児が曲をリクエストし、演奏会が続いた。

幼稚園に戻る時間になった際、幼児から丸太や竹を持って帰りたいという言葉が聞かれた。それだけ演奏会への思いが強かったのだと捉え、その思いを支えたい、この遊びが幼稚園でも広がってほしいと願い、重たい丸太や竹を幼稚園に持ち帰ろうとする様子を見守った。帰り道、F児とG児が途中休みながらも、懸命に運ぶ姿を見て、他の幼児が「手伝ってあげるよ」と2、3人で一緒に持ったり、転がしたりする姿が見られた。

振り返りタイムでは、担任が歌を歌って遊びに加わったことが、遊びの継続と、みんなと一緒に遊びを楽しむことにつながったのではないかと確認した。そして、担任はこのとき味わった楽しさを、他の幼児も体験できるようにしたいという願いをもった。また、音の出るものがあれば、誰でも参加できる演奏会の遊びは、広がり期待できる遊びだと捉え、演奏会遊びがこれからも長く続く遊びになって欲しいという思いを共有した。そこで、保育室から目の届く場所に丸太や竹、木の枝を置いておくことにした。

10月28日

H児：「先生、見てて」

教師：「いいよ。楽しみ」

H児は築山の上で、D児とバケツをたたく。

F児：「演奏会、始まりまーす。ガラガラガラ……」

教師：「やったー」拍手をする。

F児：「やっぱり、ちょっと待っててくださいね。

ガラガラガラ……」カーテンを閉める仕草をし、築山の上の幼児と話をする。

担任：「何が始まるのかな。楽しみだな」

F児たちは相談が終わると、一度築山を降りる。

その後、一列に並び、階段を上る。

F児：「演奏会、始まりまーす。ガラガラガラ……」

「こどもひろば」では、教師の近くで演奏会遊びを見ているだけだったH児が、「先生、見てて」と教師を築山の下に誘導し、自分は築山の上に上がっていった。保育室前に置いておいた木の枝を持ち、H児はD児と一緒にバケツをたたいて楽しんでいた。そこに、楽器を持たないF児が現れ、「演奏会、始まりまーす」と言ってカーテンを開ける仕草をする。教師はバケツをたたいて楽しむH児やD児、進行役を楽しむF児のそれぞれの思いを読み取り、お客として演奏会を楽しむ援助をしようと考えた。お客として、築山の下で演奏会を見ながら、築山の上にいる幼児に「楽しみだな」などと言葉をかけたり、拍手をしたりした。他の幼児が演奏会遊びのイメージに触れる機会になればと願い、あえて近くで遊ぶ幼児にも聞こえるような声で言葉かけた。

Ⅲ期は「友達と誘い合い、一緒に遊ぶことを楽しむ」時期でもあることから、幼児一人一人のやりたい思いを大切にしながら、幼児が同じ場で同じ遊びをすることの楽しさを感じていけるように、援助していこうと方向性を確認してきた。この日の振り返りでは、前日の環境構成がきっかけとなり、複数の幼児がそれぞれの思いでやりたいことを実現させながらも、教師がお客として遊びに加わることで、安心感や満足感につながり、同じ場で一緒に楽しむことができたのはいかと確認した。また、近くで違う遊びをしていた幼児も一時的に教師と一緒にお客として演奏会を楽しんでいる姿が見られ、興味が広がっていていることを共有した。今後音に関する幼児の言動にアンテナを張り、幼児が興味を示した際は、一緒に音遊びを楽しめるように援助していこうと確認した。そこで、様々な場面で音への興味を示した幼児が自分で音の出るものをつくれるように、ボトルにドングリを入れたものや、音の出そうな廃材を準備し、環境構成を更新していった。

11月1日

朝の支度を終え、園庭に出る。

I児：「演奏会しよう」

H児：「いいね。じゃあ、みんな音が出るもの持ってきて」

教師：「演奏会、いいね。どれにしようかな」

I児、H児はかごの中から音の出るものを探す。

I児：「ぼく、これにする」

H児：「先生、これ使っていいよ。いい音するよ」

教師：「ありがとう。どんな音がするんだろう。楽しみ」

H児：「ちょっと待ってて」保育室に戻り、廃材の箱や棒を持ってくる。

教師：「Hちゃん、いいもの持ってきたね。それも音がするの？」

H児：「うん。聞いてて」棒で箱をたたく。

教師：「本当だ。いい音するね」

I児：「これもいい音するよ」木の枝でバケツをたたく。

教師：「本当だ。」

H児：「これと違う音するね」

I児：「うん」

J児：「わたしもやる」

H児：「じゃあ、あっちの山に行こう」

I児：「早く行こう」

みんなで走って、グラウンドの築山に向かう。バケツやおわんを地面に置き、たたく。

H児：「『どんぐりころころ』にしようか」

J児：「うん」

H児：「せーの」

H児：「どんぐりころころ……♪」

I児：「みんなでやると楽しいね」

H児：「うん。楽しい」

教師が音に関してアンテナを張り、言葉にしてきたことで、幼児も音に敏感になり、水たまりを歩く時の音や落ち葉を踏むときの音などにも興味を示すようになってきた。「こどもひろば」での演奏会遊びから、数日にわたって演奏会遊びを楽しんでいたI児も、雨の降る日に外に出て、雨合羽に当たる雨音を聞いて「いい音するね」と言ったり、「これも音するかな」と木の枝でいろいろなものをたたいて、音遊びを楽しんでいた。これまで友達遊びを見て、自分もやりたいと途中から仲間入りすることの多かったI児だったが、この日は、支度が終わってすぐに「演奏会しよう」と自分からやりたいことを口にした。教師はそんなI児のやりたい思いを支えたいと思い、今回はお客役としてではなく、一緒に演奏会に加わることにした。砂遊びなどに使う食器が入っているかごの中から、音の出そうなものを探していると、H児が「先生、これ使っているよ。いい音するよ」とバケツとスコップを持ってきてくれた。それを教師に渡すと、H児は保育室へ戻り、以前に保育室で音遊びをしていた廃材の箱と棒を持ってきた。教師はH児の思いに共感し、その場にいた幼児の音への興味が広がることを願って、「音がするのか」と問うた。H児はその場で音を鳴らしてみせた。そのやりとりを聞いていたI児も自分のもっているもので音を鳴らした。すると、H児は音の違いを言葉にしていた。

J児が仲間に入ると、それぞれが思い思いのものをもち、築山へ向かう。この頃には、幼児にとって築山が演奏会をするステージになっていた。一目散に築山に向かって走っていく姿から「演奏会を早くしたい」「演奏会が楽しみ」という幼児の強い思いが伝わってきた。教師もうれしくなり、一緒に走って向かった。地面に置いたバケツやおわんをたたいたり、手に持った箱をたたいたりして音遊びを楽しんだ。しばらくすると、H児が『どんぐりころころ』を提案し、みんなで歌に合わせて音を鳴らして楽しんだ。教師は、『どんぐりころころ』の曲が最後まで続いてほしい、自分のやりたいように音を鳴らすことを楽しんでほしいと願い、H児と一緒に歌いながらバケツをたたいた。

振り返りタイムでは、教師がH児と一緒に歌を歌いながら音を鳴らしたことで、H児が安心して自分のやりたいことを楽しむことができたのではないかと確認した。また、I児が提案した遊びを他の幼児と一緒に楽しんだこの経験がI児の自信につながってほしいと担任・副担任で思いを共有した。

これまで3歳クラス児の多くの幼児が演奏会の遊びに触れてきた。自分で音の鳴るものをたたいて楽しむ幼児もいれば、築山の下から演奏会を見て楽しむ幼児もいた。中には、木の枝を振り、指揮者の真似をする幼児や、塩化ビニール管をメガホンのように使い、歌を歌って楽しむ幼児もいた。それぞれが自分のやりたいことを夢中になって楽しみながら、「演奏会」という同じ遊びの場でつながりをもつことができ、その心地よさを味わうことができたのではないかと考える。それがH児の「みんなでやると楽しいね」という言葉に集約されていると捉えた。

考察

幼児の思いを読み取り、その思いを大切にしたい援助を心がけてきた。この「演奏会」の遊びは、その時に参加している幼児によってそれぞれの思いがあり、さらにその思いは時がたつにつれ、変化していったように感じた。初めて演奏会に触れた幼児は、自分の鳴らしたいものを探し、いろいろなものを試しながら、音を鳴らすことを楽しむ。存分に音を鳴らすことを楽しんだ幼児は、次にみんなで歌に合わせて音を鳴らすことを楽しむようになった。さらに、歌を歌うこと、進行役をすること、指揮者をするなど、したい役になりきって遊ぶようになっていった。教師は、この遊びに加わりながら、それぞれの幼児の楽しみは何なのかをよく読み取り、援助するようにしてきた。一緒に歌を歌ったり、お客役になって演奏会を盛り上げたり、その時の様子を見ながら援助の方法を変えていった。そうすることで、幼児一人一人がその時に楽しみたいことを楽しむことにつながったと考える。

また、教師が音に関する幼児の言動にアンテナを張り、幼児の興味に合わせて遊びに加わることで長く続

く遊びになっていったと考える。1 か月以上続いたこの遊びは、3 歳クラス児の多くがかかわり、楽しむことにつながった。そして、「みんなでやると楽しいね」という言葉が象徴するように、友達と一緒に1つのことを楽しむ心地よさを多くの幼児が味わったのではないかと考える。今後も、幼児の思いを大切にしながら、友達と一緒にいること、一緒に遊ぶことの心地よさを体験できるように援助していきたい。

＜3歳クラス Ⅲ期 10・11月＞「遊びに加わり、幼児の思いを支える」

これまでの保育の様子

夏休みが明けて、バッタやカマキリを捕まえたり、ドングリを集めたりして、自分の樂したい遊びを見付け、楽しむ様子が見られた。また、複数の幼児と一緒に雨どいを組んで水を流したり、料理屋さんになりきって遊んだりする姿も見られるようになってきた。「そっち持ってくれない」「砂もってきて」などと友達とかかわりながら、遊んでいる場面もあった。振り返りでは、**幼児のやりたい思いを大切にしながら、友達と同じ場で同じ遊びを楽しめるように援助¹していこうと確認した。**

10月、4歳クラスと一緒に緑の小道の「こどもひろば」へ出かけた。初めは、遊具で遊ぶ幼児が多かったが、次第に遊具付近の自然物に興味をもち、木の枝や葉っぱを集めて遊ぶ幼児が出てきた。

10月21日「みんなの時間」

拾った木の枝で近くに横たわる丸太や竹をたたく。

担任：「いい音がするね」

D児：「うん。こっちは違う音がするよ！」

担任：「本当だ。おもしろい」

E児：「バイオリンもあるよ」

担任：「わあ、すごいね。いい音が聞こえる」

F児：「演奏会ですよ」

担任：「演奏会、いいね」²F児が歌を口ずさみながら、丸太をたたく。

担任：「どんぐりころころ……♪」

E児：「次は、『きらきらぼし』ね」

F児：「いいね、そうしよう」

担任：「きらきらひかる……♪」D児たちは、歌に合わせて、木や竹をたたく。

F児：「これ、幼稚園に持っていきたい」

副担任：「幼稚園でどうしたいの」

F児：「また演奏会やりたいの」

副担任：「そうか、いいね。どうやって持って行こうか」

G児：「ぼく、持てるよ」

木の枝を持っていろいろな物をたたき始めた数名の幼児。しばらくすると、たたく物によって、違う音が聞こえることに気付いたD児は、勢いよくそのことを担任に伝えた。E児は弓なりになっている木の枝を見付け、それをバイオリンに見立て、弾く格好をして見せた。担任は、**幼児一人一人がそれぞれのイメージで音遊びを楽しんでいると読み取り、共感した³。**すると、F児が「演奏会ですよ」と声をかけ、丸太をたたき始めた。すると、その場にいた他の幼児も丸太や竹の近くに集まり、木の枝でたたき始めた。F児は聞き覚えのない歌を口ずさんでいるように聞こえたが、すぐに聞こえなくなった。**担任はこのF児の「演奏会」という言葉で、それまで思い思いの音遊びを楽しんでいた幼児の遊びのイメージが共有されたように感じた⁴。**F児の歌が終わった後も、**イメージを共有して遊ぶ経験につながるかもしれないと考え、『どんぐりころころ』の歌を口ずさんでみた⁵。**その場にいた幼児数名が曲に合わせて丸太や竹をたたき始めた。その後も「次は、『きらきらぼし』ね」などと、幼児が曲をリクエストし、演奏会が続いた。

幼稚園に戻る時間になった際、幼児から丸太や竹を持って帰りたいという言葉が聞かれた。**それだけ演奏会への思いが強かったのだと捉え、その思いを支えたい、この遊びが幼稚園でも広がってほしいと願い⁶、**

コメントの追加 [y1]: 教師がタイミングを逃さずに、幼児の遊びのイメージを他の幼児とつなぐ役割を担うことで、遊びが広がっていくことがある。教師が幼児の思いを読み取り、その瞬間を逃さずにいることが大切。

¹ 1人遊びから少しずつ友達との遊びを意識する3歳クラスならではの援助である(d)

² 幼児の思いに共感している教師の声かけ(b)

³ 全員同じ楽器で統一するのではなく、思い思いのイメージを大切にしている(d) 一人一人のイメージを読み取り、共感する大切さ(f)

⁴ 違う楽しみを感じている幼児同士がつながる。この言葉への着目がつながりをつくる(e) 担任がイメージを共有することで幼児同士のイメージの共有のつながる(f)

⁵ 幼児の遊びをつなぐ援助(b) 1つの言葉からイメージがふくらむことがある。その瞬間を逃さずに大事にしようとした援助(e) 幼児の言葉をつぶやいたり、返したりすることで幼児自身も自分のやりたいことを再確認したり、イメージを広げたりすることができる(h)

⁶ 幼児の思いを支える援助(b)

重たい丸太や竹を幼稚園に持ち帰ろうとする様子を見守った⁷。帰り道、F児とG児が途中休みながも、懸命に運ぶ姿を見て、他の幼児が「手伝ってあげるよ」と2、3人で一緒に持ったり、転がしたりする姿が見られた。

振り返りタイムでは、担任が歌を歌って遊びに加わったことが、遊びの継続と、みんなと一緒に遊びを楽しむことにつながったのではないかと確認した⁸。そして、担任はこのとき味わった楽しさを、他の幼児も体験できるようにしたいという願いをもった。また、音の出るものがあれば、誰でも参加できる演奏会の遊びは、広がり期待できる遊びだと捉え、演奏会遊びがこれからも長く続く遊びになってほしいという思いを共有した⁹。そこで、保育室から目の届く場所に丸太や竹、木の枝を置いておくことにした¹⁰。

10月28日

H児：「先生、見てて」

教師：「いいよ。楽しみ」

H児は築山の上で、D児とバケツをたたく。

F児：「演奏会、始まりまーす。ガラガラガラ……」

教師：「やったー」拍手をする。

F児：「やっぱり、ちょっと待っててくださいね。ガラガラガラ……」カーテンを閉める仕草をし、築山の上の幼児と話をする。

担任：「何が始まるのかな。楽しみだな」

F児たちは相談が終わると、一度築山を降りる。その後、一列に並び、階段を上る。

F児：「演奏会、始まりまーす。ガラガラガラ……」

「こどもひろば」では、教師の近くで演奏会遊びを見ているだけだったH児が、「先生、見てて」と教師を築山の下に誘導し、自分は築山の上に乗っていった。保育室前に置いておいた木の枝を持ち、H児はD児と一緒にバケツをたたいて楽しんでいた。そこに、楽器を持たないF児が現れ、「演奏会、始まりまーす」と言ってカーテンを開ける仕草をする。教師はバケツをたたいて楽しむH児やD児、進行役を楽しむF児のそれぞれの思いを読み取り、お客として演奏会を楽しむ援助をしようと考えた¹¹。お客として、築山の下で演奏会を見ながら、築山の上にいる幼児に「楽しみだな」などと言葉をかけたり、拍手をしたりした。他の幼児が演奏会遊びのイメージに触れる機会になればと願い、あえて近くで遊ぶ幼児にも聞こえるような声で言葉かけた¹²。

Ⅲ期は「友達と誘い合い、一緒に遊ぶことを楽しむ」時期でもあることから、幼児一人一人のやりたい思いを大切にしながら、幼児が同じ場で同じ遊びをすることの楽しさを感じていけるように、援助していこうと方向性を確認してきた¹³。この日の振り返りでは、前日の環境構成がきっかけとなり、複数の幼児がそれぞれの思いでやりたいことを実現させながらも、教師がお客として遊びに加わることで、安心感や満足感につながり、同じ場で一緒に楽しむことができたのではないかと確認した。また、近くで違う遊びをしていた幼児も一時的に教師と一緒にお客として演奏会を楽しんでいる姿が見られ、興味が広がっていていることを共有した¹⁴。今後、音に関する幼児の言動にアンテナを張り、幼児が興味を示した際は、一緒に音遊びを楽しむように援助していこうと確認した¹⁵。そこで、様々な場面で音への興味を示した幼児が自分で音の出るものをつくれるように、ボトルにドングリを入れたものや、音の出そうな廃材を準備し、環境構成を更新

コメントの追加 [y2]: 遊びの継続や広がり願って、環境構成したことにより多くの共感が得られた。幼児の思いを読み取り、その思いが支えられるような環境構成をしていくことが大切だと考える。

コメントの追加 [y3]: お客として遊びに加わる教師の援助に共感を得た。教師がお客として遊びに加わり、共感的な言葉かけをすることで、他の幼児の興味につながったり、幼児同士のかかわりがうまれたりして、遊びが継続していくのではないかと考える。

コメントの追加 [y4]: 担任、副担任が情報共有し、幼児の興味に合わせて遊びの広がりを願う姿勢に共感を得た。日々の幼児の遊びの流れを把握し、情報共有することで遊びの継続や広がりが期待できる。幼児の興味がどこにあるのかを把握することが大切だと考える。

⁷ 無理と決めつけず、安全に配慮しながら幼児のやりたいことを保障しているところに共感する(d)

⁸ 教師を介してつながる(c) 幼児同士のイメージの共有のための担任の援助の大切さ(f)

⁹ 音が響くことで他の幼児も注目し、参加しやすい遊びである(d)

¹⁰ 「やりたい」を支える環境構成(c) 遊びが広がることで幼児の様々な育ちにつながっていくことを願って環境を更新することが大切(e)
遊びの思いと環境構成の大切さ(f) 遊びが継続することを願った援助(h)

¹¹ 幼児一人一人の思いを支えるための援助(b)

¹² あえて聞こえるようにつぶやくことで他児にも興味をもてる機会をつくっている(b) 教師を介して2つの遊びが繋がっているような感じがする。それぞれの遊びを楽しんでいる(d) 幼児同士をつなげる教師のさりげない援助(f) 遊びの広がりを願う援助(g)

¹³ 幼児の成長の時期に合わせた援助の確認(f)

¹⁴ H児の「見ていてほしい」という思いに応えながら、表現する面白さにつながるような言葉をお客役としてかけている。多方面に心を配っている援助が3歳クラス児の育ちにつながっていると思う(e)

¹⁵ 担任・副担任の情報共有。同じ方向を向いて保育する上で重要(b) 幼児の興味に合わせて教師がアンテナを高くすることで援助のレパトリーをたくさんもてる(c) 一緒に遊ぶことで遊びの継続を願った援助(f)

していった¹⁶。

11月1日

朝の支度を終え、園庭に出る。
I児：「演奏会しよう」
H児：「いいね。じゃあ、みんな音が出るもの持ってきて」
教師：「演奏会、いいね。どれにしようかな」
I児、H児はかごの中から音の出るものを探す。
I児：「ぼく、これにする」
H児：「先生、これ使っていいよ。いい音するよ」
教師：「ありがとう。どんな音がするんだろう。楽しみ」
H児：「ちょっと待ってて」保育室に戻り、廃材の箱や棒を持ってくる。
教師：「Hちゃん、いいもの持ってきたね。それも音がするの？」
H児：「うん。聞いてて」棒で箱をたたく。
教師：「本当だ。いい音するね」
I児：「これもいい音するよ」木の枝でパケツをたたく。
教師：「本当だ。」
H児：「これと違う音するね」
I児：「うん」
J児：「わたしもやる」
H児：「じゃあ、あっちの山に行こう」
I児：「早く行こう」みんなで走って、グラウンドの築山に向かう。パケツやおわんを地面に置き、たたく。
H児：『どんぐりころころ』にしようか」
J児：「うん」
H児：「せーの」
H児：「どんぐりころころ……♪」¹⁷
I児：「みんなでやると楽しいね」
H児：「うん。楽しい」

教師が音に関してアンテナを張り、言葉にしてきたことで、幼児も音に敏感になり、水たまりを歩く時の音や落ち葉を踏むときの音などにも興味を示すようになってきた¹⁸。「こどもひろば」での演奏会遊びから、数日にわたって演奏会遊びを楽しんでいたI児も、雨の降る日に外に出て、雨合羽に当たる雨音を聞いて「いい音するね」と言ったり、「これも音するかな」と木の枝でいろいろなものをたたいて、音遊びを楽しんでいた。これまで友達遊びを見て、自分もやりたいと途中から仲間入りすることの多かったI児だったが、この日は、支度が終わってすぐに「演奏会しよう」と自分からやりたいことを口にした。教師はそんなI児のやりたい思いを支えたいと思い、今回はお客役としてではなく、一緒に演奏会に加わることにした¹⁹。砂遊びなどに使う食器が入っているかごの中から、音の出そうなものを探していると、H児が「先生、これ使っていいよ。いい音するよ」とパケツとスコップを持ってきた。それを教師に渡すと、H児は保育室へ戻り、以前に保育室で音遊びをしていた廃材の箱と棒を持ってきた。教師はH児の思いに共感し、その場にいた幼児の音への興味が広がることを願って、「音がするのかな」と問うた。H児はその場で音を鳴らしてみせた。そのやりとりを聞いていたI児も自分のもっているもので音を鳴らした。すると、H児は音の違いを言葉にしていた²⁰。

コメントの追加 [y5]: 教師が保育中に幼児の興味に合わせてアンテナを高くしておくことに多くの共感を得た。教師が幼児の楽しみが何なのかを意識しながら、幼児の興味に合った言葉かけをしていくことで、幼児の遊びのイメージが広がっていくのではないかと考える。

コメントの追加 [y6]: 教師がそのときの幼児の思いに合わせて援助を変えていくことに共感を得た。それまでの幼児の育ちやそのときの幼児の思いを読み取り、その場に合った援助をしていくことが大切。そのベースには、幼児理解があり、これまでのその幼児の経験や幼児の思いを読み取ることが大切だと考える。

¹⁶ あくまでも幼児の自発性を大切に環境構成で遊びの広がりを支えている(e) 興味をもっている遊びが継続するような働きかけ(h)

¹⁷ 以前担任がロズさんだ「どんぐりころころ」がよいきっかけになってのこっていたのではないか(g)

¹⁸ 幼児の遊びを支えるための教師の願いをもとに援助してきたことで見えてきた遊びの発展(b) 言葉にすることで幼児が楽しみを自覚できる(c) 教師が「これだ」と思っているものを心に留めておくことで、援助のタイミングをつかむことができる(d) イメージを言葉にすることでさらに遊びのイメージが広がる(f) 日常での言葉かけの大切さ(h)

¹⁹ 幼児の成長や小さな変化を見逃さずに見守ってきたことでできる援助(b) 教師の役割は1つではなく、その場の状況によって変えることによって遊びがより強く支えられるのではないか(d) 幼児のこれまでの育ちを捉えた上で援助の判断を行うことが大切(e) 幼児理解がベースになって、瞬時に援助を判断することができる(g) 観客になったり、演奏仲間になったり、願いによって働きかけは変わる(h)

²⁰ 教師が言葉にしてきたからその姿(c)

J児が仲間に入ると、それぞれが思い思いのものをもち、築山へ向かう。この頃には、幼児にとって築山が演奏会をするステージになっていた。一目散に築山に向かって走っていく姿から「演奏会を早くしたい」「演奏会が楽しみ」という幼児の強い思いが伝わってきた。教師もうれしくなり、一緒に走って向かった²¹。地面に置いたバケツやおわんをたたいたり、手に持った箱をたたいたりして音遊びを楽しんだ。しばらくすると、H児が『どんぐりころころ』を提案し、みんなで歌に合わせて音を鳴らして楽しんだ。教師は、『どんぐりころころ』の曲が最後まで続いてほしい、自分のやりたいように音を鳴らすことを楽しんでほしいと願い、H児と一緒に歌いながらバケツをたたいた²²。

振り返りタイムでは、教師がH児と一緒に歌を歌いながら音を鳴らしたことで、H児が安心して自分のやりたいことを楽しむことができたのではないかと確認した。また、I児が提案した遊びを他の幼児と一緒に楽しんだこの経験がI児の自信につながってほしいと担任・副担任で思いを共有した。

これまで3歳クラスの多くの幼児が演奏会の遊びに触れてきた。自分で音の鳴るものをたたいて楽しむ幼児もいれば、築山の下から演奏会を見て楽しむ幼児もいた。中には、木の枝を振り、指揮者の真似をする幼児や、塩化ビニール管をメガホンのように使い、歌を歌って楽しむ幼児もいた²³。それぞれが自分のやりたいことを夢中になって楽しみながら、「演奏会」という同じ遊びの場でつながりをもつことができ、その心地よさを味わうことができたのではないかと考える。それがH児の「みんなでやると楽しいね」という言葉に集約されていると捉えた²⁴。

考察

幼児の思いを読み取り、その思いを大切にしたい援助を心がけてきた。この「演奏会」の遊びは、その時に参加している幼児によってそれぞれの思いがあり、さらにその思いは時がたつにつれ、変化していったように感じた²⁵。初めて演奏会に触れた幼児は、自分の鳴らしたいものを探し、いろいろなものを試しながら、音を鳴らすことを楽しむ。存分に音を鳴らすことを楽しんだ幼児は、次にみんなで歌に合わせて音を鳴らすことを楽しむようになった。さらに、歌を歌うこと、進行役をすること、指揮者をすることなど、それぞれがやりたい役になりきって遊ぶようになっていった。教師は、この遊びに加わりながら、一人一人の幼児の楽しみは何なのかをよく読み取り、援助するようにしてきた。また、一緒に歌を歌ったり、お客役になって演奏会を盛り上げたりと、その時の様子を見ながら援助の方法を変えていった。そうすることで、幼児一人一人がその時に楽しみたいことを楽しむことにつながったと考える²⁶。

また、教師が音に関する幼児の言動にアンテナを張り、幼児の興味に合わせて遊びに加わることで長く続く遊びになっていったと考える²⁷。1か月以上続いたこの遊びは、3歳クラス児の多くがかかわり、楽しむことにつながった²⁸。そして、「みんなでやると楽しいね」という言葉が表すように、友達と一緒に同じ場で同じ遊びを楽しむ心地よさを多くの幼児が味わったのではないかと考える²⁹。今後も、幼児の思いを大切にしながら、友達と一緒にいること、一緒に遊ぶことの心地よさを体験できるように援助していきたい。

コメントの追加 [y7]: これまで一人遊びが中心だった3歳クラス児にとって、少しずつ友達を感じる遊びになったことへの共感が得られた。一人一人の幼児の「やりたい」に寄り添いながら、教師と一緒に遊びを楽しむことでそれが幼児の安心感につながり、「みんなで一緒にやると楽しい」という思いにつながったと考える。

コメントの追加 [y8]: 幼児の思いに合わせて援助していくことに共感を得た。幼児一人一人の楽しみは何なのか、どんな思いでいるのかを読み取り、それに合った援助をしていくことが大切。また、そのときの幼児の思いや教師の願いによって援助を変えていくことで、幼児が安心して遊べるのではないかと考える。

コメントの追加 [y9]: 今回の「演奏会」の遊びが、幼児にとって「みんなでやると楽しい」という経験になっていることに多くの共感を得た。この経験が、今後友達と一緒に遊ぶことの楽しさにつながり、集団遊び、協同する遊びの土台になるのではないかと考える。

²¹ 教師も一緒に楽しむことで幼児も安心して遊ぶ。安心することで思いきり楽しめる遊びへとっていく**(b)** 教師の援助によって幼児は演奏会がより楽しくなり、幼児の「楽しい」が教師の「うれしい」になったと思う**(d)**

²² 初めて参加した幼児の「やりたい」思いを支えたいという願いに共感した**(e)** 以前教師がロザさんだ歌が遊びとして継続している**(h)**

²³ 音にアンテナを張って支えてきたからこそ出てきた幼児の姿**(c)**

²⁴ 幼児一人一人の「やりたい」を支えたことで得ることのできた「楽しい場」になった**(b)** 一人一人の思いに寄り添う教師の存在が幼児同士のかかわりにおいても安心感につながっていると感じた**(e)** それぞれの楽しいことのイメージを共有することで「みんなでやる楽しさ」につながっていく。それを言葉にすることで「みんなでやる楽しさ」が積みあがっていく**(f)** みんなでやると楽しいという経験につながった。「演奏会」という言葉がみんなでイメージや思いを共有しやすい**(h)**

²⁵ 思いの変化を確かに読み取ろうとする教師の姿**(c)**

²⁶ 幼児一人一人の思いを読み取ることで、幼児理解が深まり、援助の方向性を見付けやすくなる**(b)** 同じ「遊びに加わる」という援助でも、その中にレパートリーがある。捉えが広がる**(c)** 遊びに加わることで幼児の何を支えたいのかという願いをもっていることが大切**(e)** 一人一人の遊びの楽しさに寄り添う**(f)**

²⁷ キーワードを心に留めておくとなんとなく流れていく遊びの中での援助のタイミングが分かる**(d)**

²⁸ 一人一人に対する読み取りがあって、一人一人にマッチした援助が行われた結果、幼児と一緒に遊ぶことにつながった**(g)**

²⁹ 協同する姿につながっていく**(c)** まだ一人遊びが多い3歳クラス児の遊びから少しずつ「友達と」が楽しい経験になることでこれからの集団遊びの土台になる**(d)** 一人一人の楽しみのイメージを共有することで「みんなでやると楽しいね」を味わう経験になっている**(f)** 友達と一緒に遊ぶことはもちろん、「先生と一緒に遊ぶと楽しい」「先生と遊べてうれしい」という思いも入っていると感じる**(h)**

＜3歳クラス IV期 1・2月＞「幼児の思いをつなぐ援助」

これまでの保育の様子

3学期になり、屋内での遊びが中心になってきた。保育室の環境構成を更新し、廃材や折り紙、スズランテープなどを自由に使えるようにした。そのことで、多くの幼児が製作遊びに興味を示すようになってきた。副担任とは、製作すること自体を楽しみながらも、製作したものを使った遊びが広がっていくことを願って、援助していこうと確認していた。

ある日、「ドレスをつくりたいから袋がほしい」という幼児の言葉から、衣装づくりが始まり、ドレスをつくった多くの幼児がプリンセスのショーごっこをするようになっていた。振り返りタイムでは、多くの幼児が楽しんでいるこのショーごっこが長く続く遊びになるように願い、教師がお客役になったり、一緒にショーに参加したりしながら、幼児同士の思いをつなぐ援助をしていこうと、援助の方向性を共有していた。

1月18日

遊戯室で、ヒーローショーごっこが始まる。

K児：「おりゃー」

L児：「ビームってこうやるんだよ」

K児：「こうもあるよ」ポーズや攻撃のしかたをやってみる。

互いに相手の腕をひっぱったり、背中や肩を押したりしている。

K児：「やめて」泣き出す。

L児は、K児の近くに寄っていき、K児の顔をのぞき込む。

教師：「どうしたの？」

L児：「手が当たっちゃったのかな」

K児：「痛かった」

教師：「どこかに当たったの？」

K児：「ここ」目のあたりをおさえる。

教師：「痛かったんだね」

L児：「でも、たたかってたんだよ」

教師：「そうだね。たたかってたんだね。たたかいたかったんだよね」

K児：「でも、痛かった」

教師：「Kちゃんは、どうしてほしかったの」

K児：「やさしくしてほしい」

教師：「やさしくたたかうってこと？」

K児：「うん」

L児：「うーん」

教師：「どうやったら、やさしくたたかえるかな？」

K児：「本当にはパンチしない」

教師：「Lくん、本当にはパンチしないんだって。どうやるんだろうね」

K児：「こうだよ」おなかのあたりに、やさしく腕を伸ばす。

教師：「これなら、痛くない？」

L児：「うん。これなら痛くない」

教師：「これなら、痛くならないでたたかえそう？」

K児、L児：「うん」

教師：「よかった。これでまた、ヒーローショーできるね」

2人はまたヒーローショーを始める。

朝の支度をしながら、お店で観たヒーローショーの話題で盛り上がるK児とL児。教師はヒーローショーの話を聞きながら、この経験が遊びにつながるのではないかと考え、その場で共感しながら話を聞いたり、ヒーローショーでの様子を問いかけたりした。支度が終わると、2人は遊戯室へ行き、ヒーローショーごっこを始めた。教師は、2人の幼児がこれまでヒーローごっこなど、相手とたたかうような遊びを経験していないことから、安全面での配慮が必要だろうと捉え、近くで見守ることにした。ヒーローショーごっこが始まってしばらくすると、K児が泣き出した。L児の手が顔に当たったようだった。その様子を近くで見守っ

ていた教師は、今が2人にとって、相手の思いを知る機会になるのではないかと考え、仲介に入った。安全面を考え、教師から「パンチはしない」などと話をすることもできたが、K児にとってもL児にとっても、たたかうことが楽しみであり、どうしたら互いに痛い思いをせず、たたかいを楽しめるのかを一緒に考えることが、2人の学びにつながると考え、一緒に考えることにした。痛い思いをしたK児は「やさしくしてほしい」と自分の思いを伝えた。しかし、L児の表情や言葉からK児のいう「やさしくする」とはどのようなことなのか伝わっていないのではないかと捉えた。そこで、教師は「やさしくたたかう」とはどのようなことなのか、具体的にL児に伝わることを願って、「どうやったら、やさしくたたかえるのか」を問うた。K児は、「本当にパンチをしない」ことを提案し、実際にやって見せることでL児も納得したようだった。そして、その後もヒーローショーごっこを続けていた。

複数の幼児と一緒に遊んでいるとき、それぞれの思いが共有されていないために、遊びが続かないケースがよくある。さらにこのヒーローショーごっこの遊びでは、たたかうことを楽しんでいるため、たたかいの場面において、安全面での配慮が欠かせない。そのようなことから、教師は必要に応じてすぐに援助できるように、近くで2人のたたかひの様子を見守ることにした。実際、K児が痛い思いをしたことをきっかけに、2人で話し合う機会につながった。安全面に配慮しながらも、幼児のヒーローショーごっこをやりたいという思いに寄り添うことで、幼児の思いが語られ、幼児自ら「こうやっていこう」という話をするにつながった。振り返りタイムでは、この後同じようにヒーローになりきって遊ぶ幼児が増えた際、K児やL児のこの日の話し合いをもとに、他の幼児にも伝わっていくように援助していこうと方向性を確認した。また、もっとヒーローの世界に入り込み、ヒーローになりきって遊べるように、衣装や武器のための材料を欲しい時にすぐに出せるように準備しておくことにした。

2月3日

K児、L児の2人がヒーローショーごっこをしている。

N児：「入れて」

L児：「だめだよ。できないよ」

N児：「えー、ぼくもやりたい」泣き始める。

L児：「うーん。でも2人でやってるから…」

N児：「でも、ぼくもやりたい」

近くにいたM児が教師のところにやってくる。

M児：「Nくんもやりたいんだって」

教師：「そうなんだ。Nくんもやりたいんだね」

M児：「Nくんもやりたいんだって」

K児：「でもヒーローは、ピコンピコン付けるんだよ」

N児：「付けたよ」

K児：「これはちがうから、ヒーローになれないよ」

L児：「これは、ちがうんだよ」

教師：「そっか。なにかちがうんだね」

K児：「そうだよ。こんなに大きくないんだよ」

教師：「そうなんだ。どうしたらなれるのかな」

M児：「またつくる？」

N児：「うん」胸の飾りをむしり取る。

K児：「うーん。そうだ。ピコンピコンつくってあげようか」

N児：「うん」

教師：「そうしたら、一緒にヒーローショーできるってこと？」

K児、L児：「いいよ」

教師：「Lくんもいいの？」

L児：「いいよ」

教師：「Nくん、やったね」

N児：「うん」

K児とL児を中心に、ヒーローショーごっこは続いていた。2人は遊びが続いていく中で、ヒーローは胸に飾りを付けているから、自分たちもつくって付けたいという思いをもった。製作テーブルにヒーローの衣装や武器になりそうなものを準備していたことで、すぐに自分たちでつくるようになっていた。この頃には、

朝の支度が終わるとすぐに製作テーブルへ行き、折り紙で飾りをつくってからヒーローショーごっこをしていた。それを見ていたN児もヒーローになりたいという思いをもち、自分で折り紙をちぎり、胸に付けて遊びの仲間入りをしようとしていた。しかし、L児から「だめだよ」と伝えられる。2人のやりとりを遠くから見ていた教師は、L児はK児と2人でやりたいという思いをもっていることを読み取った。しかし、L児と一緒にヒーローショーごっこをしていたK児の思いは読み取れなかったため、近くにいたM児が教師のところに話をしに来たことをきっかけに、仲介に入り、それぞれの思いをつなぐ援助をしようと判断した。話を聞いていくうちに、L児はK児とN児のやりとりを見ていて、気持ちが変わったのか、一緒にヒーローショーごっこをやることを受け入れていた。

幼児の思いは、様々な要因で更新されていく。初めはK児と2人でやりたい思いをもっていたL児だったが、他の幼児の思いを聞いたり、その場の状況が変わったりしていくことで、気持ちの変化があったのではないかと考えられる。教師は、それぞれの幼児の思いをつなぎ、幼児が自分で考え、自分の思いを伝えることができるように、さりげなくその場をつくる役割を担っているのではないかと考える。振り返りタイムでは、相手の思いを聞き、相手の思いを知る経験を積んでいくことで、自分の思いだけでなく、相手のことも考えられるようになっていくのではないかと振り返った。今後もそのような場面を大切にしながら、丁寧に幼児の思いを聞き、つなぐ援助をしていくことを確認した。

考察

Ⅳ期は「周囲とかかわりながら、自分の遊びを広げていく時期」であり、このショーごっこの遊びは友達とのかかわりの中で、イメージを共有しながら、発展していく遊びになっていった。教師は、友達とのかかわりを大切にし、その中で困っていることやうまくいかないことがあった時には、それとなく仲介役になってそれぞれの幼児が思いを伝えたり、考えたりする場をもてるようにしていこうと考えていた。

ショーごっこが続いていく中で、K児やL児は1月18日の経験から、新しくショーに加わる仲間に、「やさしくするんだよ」「本当にパンチとかはしないんだよ」「Kちゃんみたいに痛くなっちゃうから」と伝える場面がよく見られた。互いの思いを知り、自分たちで話をしながらつくりあげた「やくそくごと」だからこそ、幼児自身の中に根付いていったのではないかと考える。教師が与えるだけの「やくそくごと」ではなく、幼児の経験があつての「やくそくごと」だからこそ意味があり、他の幼児にも浸透していったのではないかと捉えた。教師は安全面を十分配慮しながらも、幼児が困る場面やうまくいかない場면을先回りせず、幼児の育ちにつながるような援助を心がける必要がある。そして、これからも幼児が自分の思いを安心して素直に話せる環境をつくっていきたいと考える。

＜3歳クラス IV期 1・2月＞「幼児の思いをつなぐ援助」

これまでの保育の様子

3学期になり、屋内での遊びが中心になってきた。保育室の環境構成を更新し、廃材や折り紙、スズランテープなどを自由に使えるようにした¹。そのことで、多くの幼児が製作遊びに興味を示すようになってきた。副担任とは、製作すること自体を楽しみながらも、製作したものを使った遊びが広がっていくことを願って、援助していこうと確認していた。

ある日、「ドレスをつくりたいから袋がほしい」という幼児の言葉から、衣装づくりが始まり、ドレスをつくった多くの幼児がプリンセスのショーごっこをするようになっていた。振り返りタイムでは、多くの幼児が楽しんでいるこのショーごっこが長く続く遊びになるように願い、教師がお客役になったり、一緒にショーに参加したりしながら、幼児同士の思いをつなぐ援助をしていこうと、援助の方向性を共有していた³。

1月18日

遊戯室で、ヒーローショーごっこが始まる。

K児：「おりゃー」

L児：「ビームってこうやるんだよ」

K児：「こうもあるよ」ポーズや攻撃のしかたをやってみる。

互いに相手の腕をひっぱったり、背中や肩を押したりしている。

K児：「やめて」泣き出す。

L児は、K児の近くに寄っていき、K児の顔をのぞき込む。

教師：「どうしたの？」

L児：「手が当たっちゃったのかな」

K児：「痛かった」

教師：「どこかに当たったの？」

K児：「ここ」目のあたりをおさえる。

教師：「痛かったんだね」

L児：「でも、たたかってたんだよ」

教師：「そうだね。たたかってたんだね。たたかいたかったんだよね」

K児：「でも、痛かった」

教師：「Kちゃんは、どうしてほしかったの」⁴

K児：「やさしくしてほしい」

教師：「やさしくたたかうってこと？」

K児：「うん」

L児：「うーん」

教師：「どうやったら、やさしくたたかえるかな？」

K児：「本当にはパンチしない」

教師：「Lくん、本当にはパンチしないんだって。どうやるんだろうね」

K児：「こうだよ」おなかのあたりに、やさしく腕を伸ばす。

教師：「これなら、痛くない？」

L児：「うん。これなら痛くない」

教師：「これなら、痛くならないでたたかえそう？」

K児、L児：「うん」

教師：「よかった。これでまた、ヒーローショーできるね」⁵

2人はまたヒーローショーを始める。

コメントの追加 [y1]: 幼児の思いを読み取りながら、遊びの広がりを願う教師の援助の方向性に共感を得た。屋内遊びが中心になり、なかなか遊びが続かないことや広がっていないことが気になっていた。そこで、担任は副担任と製作して終わりではなく、製作した物を使って遊んだり、やりたいことを実現させるために製作したりすることを念頭に置きながら、援助していこうと確認した。教師が幼児の発想で遊びを楽しむ姿を思い描いて援助していくことの大切さを改めて感じた。

¹ 遊びの広がりを願った環境構成の更新(b)

² 援助の方向性を確認することで、同じ方向を向いて保育することができる(b) 一人一人の遊びの楽しみを読み取ろうとしている(c) つくった満足からの広がり。遊びの広がり。楽しみが広がる(h)

³ そばにいる、お客になることで遊びをつなぐ援助(f)

⁴ 幼児がどうしたかったのかという思いを引き出す言葉かけ(c)

⁵ 幼児の思いに寄り添い、思いをつなぐための援助。教師からルールを伝えず、幼児が考えられるよう配慮されている(b)

朝の支度をしながら、お店で観たヒーローショーの話題で盛り上がるK児とL児。教師はヒーローショーの話を聞きながら、この経験が遊びにつながるのではないかと考え、その場で共感しながら話を聞いたり、ヒーローショーでの様子を問いかけたりした⁶。支度が終わると、2人は遊戯室へ行き、ヒーローショーごっこを始めた。教師は、2人の幼児がこれまでヒーローごっこなど、相手とたたかうような遊びを経験していないことから、安全面での配慮が必要だろうと捉え、近くで見守ることにした⁷。ヒーローショーごっこが始まってしばらくすると、K児が泣き出した。L児の手が顔に当たったようだった。その様子を近くで見守っていた教師は、今が2人にとって、相手の思いを知る機会になるのではないかと考え、仲介に入った。安全面を考え、教師から「パンチはしない」などと話をすることもできたが、K児にとってもL児にとっても、たたかうことが楽しみであり、どうしても互いに痛い思いをせずに、たたかいを楽しめるのかを一緒に考えることが、2人の学びにつながると考え、一緒に考えることにした⁸。痛い思いをしたK児は「やさしくしてほしい」と自分の思いを伝えた。しかし、L児の表情や言葉からK児のいう「やさしくする」とはどのようなことなのか伝わっていないのではないかと捉えた。そこで、教師は「やさしくたたかう」とはどのようなことなのか、具体的にL児に伝えることを願って、「どうやったら、やさしくたたかえるのか」を問うた。K児は、「本当にパンチをしない」ことを提案し、実際にやって見せることでL児も納得したようだった。

コメントの追加 [y2]: 幼児の興味のあることに共感する教師の姿勢に共感を得た。教師自身が幼児の話に興味をもつことで、幼児の「やってみたい」という思いを引き出すにつながると考える。

コメントの追加 [y3]: 幼児の経験を踏まえた安全面での配慮に多くの共感を得た。幼児一人一人の思いに寄り添いながら、安全にも配慮した援助を考える必要がある。これまでの幼児の経験と照らし合わせながら、教師の立ち位置を判断することが大切だと考える。

コメントの追加 [y4]: 幼児同士のかかわりを大切にしながら、幼児自身がルールを考える援助に共感を得た。教師はあくまで「黒子」であるという立ち位置を忘れず、幼児同士が納得のいくルールを自らつくることができるように、幼児のそれぞれの思いを引き出す援助をする必要があると考える。

-
- ⁶ 1つ1つの遊びから得た経験が次の遊びや友達とのかかわりの土台になるのだと思う(d) 幼児の興味に教師も興味を寄せることが、遊びのきっかけになると考えて援助している(e) 教師も興味をもっているということが伝わると、きっと子どももうれしくなる。やってみたい気持ち치가ふくらむ(h)
- ⁷ これまでの幼児の経験を踏まえての援助。幼児理解を日々積み重ねてきた結果でできる援助(b)ヒーローショーが白熱すると思わぬケガにつながるため、必要な援助だと考える(d) これまでの経験の有無をふまえた幼児理解に基づく適切な援助(e) 安心して遊ぶための配慮。安心、安全の提供(h)
- ⁸ 幼児が自らルールを考えることで相手の気持ちに気付き、思いを寄せることができる(b) 教師も一緒に考えることで安心感につながり、ひいてはそれが幼児同士で折り合う姿につながっていく(c) 教師が一方的にやらないルールを伝えるのではなく、幼児なりに考えて答えを出す経験が大切であると考える(d) トラブルが大切な学びの機会になると考えている(e) どうしたらよいかと一緒に考える援助の大切さ(f) 大人がルールを決めたり提案したりするのは簡単で、楽ではあるが、子ども達自身が考えたことは、きっと子ども達に根付いていくだろう。時間はかかるかもしれないが、学びにもつながる。自分もこのような姿勢を大切にしたい(h)

た⁹。そして、その後もヒーローショーごっこを続けていた。

複数の幼児と一緒に遊んでいるとき、それぞれの思いが共有されていないために、遊びが続かないケースがよくある。さらにこのヒーローショーごっこの遊びでは、たたかうことを楽しんでいるため、たたかいの場面において、安全面での配慮が欠かせない¹⁰。そのようなことから、教師は必要に応じてすぐに援助できるように、近くで2人のたたかいの様子を見守ることにした。実際、K児が痛い思いをしたことをきっかけに、2人で話し合う機会につながった。安全面に配慮しながらも、幼児のヒーローショーごっこをやりたいという思いに寄り添うことで、幼児の思いが語られ、幼児自ら「こうやっていこう」という話をするにつながった¹¹。振り返りタイムでは、この後同じようにヒーローになりきって遊ぶ幼児が増えた際、K児やL児のこの日の話し合いをもとに、他の幼児にも伝わっていくように援助していこうと方向性を確認した¹²。また、もっとヒーローの世界に入り込み、ヒーローになりきって遊べるように、衣装や武器のための材料を欲しい時にすぐに出せるように準備しておくことにした¹³。

2月3日

K児、L児の2人がヒーローショーごっこをしている。

N児：「入れて」

L児：「だめだよ。できないよ」

N児：「えー、ぼくもやりたい」泣き始める。

L児：「うーん。でも2人でやってるから…」

N児：「でも、ぼくもやりたい」

近くにいたM児が教師のところにやってくる。

M児：「Nくんもやりたいんだって」

教師：「そうなんだ。Nくんもやりたいんだね」

M児：「Nくんもやりたいんだって」

K児：「でもヒーローは、ピコンピコン付けるんだよ」

N児：「付けたよ」

K児：「これはちがうから、ヒーローになれないよ」

L児：「これは、ちがうんだよ」

教師：「そっか。なにかちがうんだね¹⁴」

K児：「そうだよ。こんなに大きくないんだよ」

教師：「そうなんだ。どうしたらなれるのかな」

M児：「またつくる？」

N児：「うん」胸の飾りをむしり取る。

K児：「うーん。そうだ。ピコンピコンつくってあげようか」

N児：「うん」

教師：「そうしたら、一緒にヒーローショーできるってこと？」

K児、L児：「いいよ」

教師：「Lくんもいいの？」

L児：「いいよ」

教師：「Nくん、やったね」

N児：「うん」

K児とL児を中心に、ヒーローショーごっこは続いていた。2人は遊びが続いていく中で、ヒーローは胸

⁹ 「やさしくして」「ちゃんとして」など大人はついつい声をかけてしまうが、経験などの少ない幼児では抽象的でイメージしにくいと考える。実演してもらうことで、幼児2人が「やさしくたたかう」ことについてイメージを共有できたのではと思う(d)「たたかう」と「やさしくする」で、子どもはちょっとした矛盾を感じているのではないか。具体的な援助に共感できる(h)

¹⁰ たたかいごっこを楽しみながらの安全面の配慮(f)

¹¹ 教師が「たたかう」に対してフラットな立場で仲介している。そして、自分たちで考えていけると信じていることがよい方向につながったと思う(e)安全面に配慮しながらも子どもの思いを大切に寄り添う援助(f)

¹² 援助についての方向性の更新。日々の幼児の変化に合わせて更新している(b)同じクラスの子ども達が同じような経験ができるように担任・副担任で共有しておくことは大切だと思う(d)

¹³ もしかしらこれをやるかもしれないという多様な想定のもとで、いつでも「やりたい」を支えられるようにしている(c)遊びの広がり、環境も提供(h)

¹⁴ 双方の気持ちに共感している(b)

に飾りを付けているから、自分たちもつくって付けたいという思いをもった。製作テーブルにヒーローの衣装や武器になりそうなものを準備していたことで、すぐに自分たちでつくるようになっていた¹⁵。この頃には、朝の支度が終わるとすぐに製作テーブルへ行き、折り紙で飾りをつくってからヒーローショーごっこをしていた。それを見ていたN児もヒーローになりたいという思いをもち、自分で折り紙をちぎり、胸に付けて遊びの仲間入りをしようとしていた。しかし、L児から「だめだよ」と伝えられる。2人のやりとりを遠くから見ていた教師は、L児はK児と2人でやりたいという思いをもっていることを読み取った。しかし、L児と一緒にヒーローショーごっこをしていたK児の思いは読み取れなかったため、近くにいたM児が教師のところに話をしに来たことをきっかけに、仲介に入り、それぞれの思いをつなぐ援助をしようと判断した¹⁶。話を聞いていくうちに、L児はK児とN児のやりとりを見ていて、気持ちが変わったのか、一緒にヒーローショーごっこをやることを受け入れていた。

幼児の思いは、様々な要因で更新されていく¹⁷。初めはK児と2人でやりたい思いをもっていたL児だったが、他の幼児の思いを聞いたり、その場の状況が変わったりしていくことで、気持ちの変化があったのではないかと考えられる¹⁸。教師は、それぞれの幼児の思いをつなぎ、幼児が自分で考え、自分の思いを伝えることができるように、さりげなくその場をつくる役割を担っているのではないかと考える。振り返りタイムでは、相手の思いを聞き、相手の思いを知る経験を積んでいくことで、自分の思いだけでなく、相手のことも考えられるようになっていくのではないかと振り返った¹⁹。今後もそのような場面を大切にしながら、丁寧に幼児の思いを聞き、つなぐ援助をしていくことを確認した。

考察

IV期は「周囲とかかわりながら、自分の遊びを広げていく時期」であり、このショーごっこの遊びは友達とのかかわりの中で、イメージを共有しながら、発展していく遊びになっていった。教師は、友達とのかかわりを大切にし、その中で困っていることやうまくいかないことがあった時には、それとなく仲介役になってそれぞれの幼児が思いを伝えたり、考えたりする場をもてるようにしていこうと考えていた。

ショーごっこが続いていく中で、K児やL児は1月18日の経験から、新しくショーに加わる仲間に、「やさしくするんだよ」「本当にパンチとかはしないんだよ」「Kちゃんみたいに痛くなっちゃうから」と伝える場面がよく見られた。互いの思いを知り、自分たちで話をしながらつくりあげた「やくそくごと」だからこそ、幼児自身の中に根付いていったのではないかと考える。教師が与えるだけの「やくそくごと」ではなく、幼児の経験があつての「やくそくごと」だからこそ意味があり、他の幼児にも浸透していったのではないかと捉えた²⁰。教師は安全面を十分配慮しながらも、幼児が困る場面やうまくいかない場面を先回りせず、幼児の育ちにつながるような援助を心がける必要がある²¹。そして、これからも幼児が自分の思いを安心して素直に話せる環境をつくっていきたいと考える。

コメントの追加 [y5]: 幼児の遊びの流れを想定した環境構成に共感を得た。幼児の遊びの様子や表情、言動から幼児の思いを読み取り、必要になりそうなものやこれがあったら遊びが続きそう、遊びが広がりそうだと考えるものをさりげなく準備しておくことが大切だと考える。

コメントの追加 [y6]: 幼児が思いを伝える場を教師がさりげなくつくる援助に共感を得た。教師は、幼児が自分の率直な思いを安心して表現できるように、その場をつくる必要がある。また、幼児同士が互いの思いを伝えるだけでなく、相手の思いを聞く機会でもあると捉え、援助していく必要がある。

コメントの追加 [y7]: 幼児自身が自分たちでつくる「やくそくごと」に共感を得た。教師が大人の価値観でルールを押しつけるのではなく、幼児自身が自分たちの経験からつくりあげることの意味があり、その結果自分たちが納得できるような解決に至ることが大切だと考える。

コメントの追加 [y8]: 幼児の育ちを願う教師の援助に共感を得た。長期的な幼児の育ちを想定し、幼児が困る場面やうまくいかない場面こそ学びの機会であると捉え、援助していくことが大切であると考えた。

¹⁵ 遊びを支える環境構成**(b)** 遊びの流れを想定して環境構成をしていることが幼児の「やりたい」思いを支えている**(e)** 環境構成、種まきにより子どもの遊びにつながる**(f)**

¹⁶ 1つの場面、1つの言葉からは全てを読み取れないことがある。子どもの思いも変化していくと捉えていることに共感した**(d)**

¹⁷ 更新されていくことへの大人の気付きの大切さ**(f)**

¹⁸ 変化を見逃さない教師の見取り**(h)**

¹⁹ 目の前の幼児の「今」をよく理解し、長期的な成長を願った援助の方向性の確認と情報共有**(b)** 「さりげなく」が大切。思いを伝え合うのは子ども達でそのきっかけをつくるのが教師の役割だと考えた**(c)** 教師の役割として「伝える場をつくる」に共感した。伝える場、伝えることができる場をつくるためにも子どもとの信頼関係を築いていきたいと思った**(d)** 自分の思いを伝え、相手の思いを聞く経験を大切にしていこうと、いずれ自分たちで解決していく力が育まれていくと考える**(e)** 幼児同士をつなぐ役割。大人の立ち位置。伝える、聞くことを積んでいくことで、相手のことも考えられることにつながる**(f)** 3歳クラスのときから、機会を捉えて積み重ねていくことが大切だと強く思う**(h)**

²⁰ 幼児が経験をともに主体的につくりあげたルール**(b)** 自分たちのくらしは自分たちでつくっていく姿**(c)** 子ども達がお互いに納得できることを探る経験が大切なのだと考える。大人が「やくそく」を押しつけない**(d)** 経験が学びに結びついていることが分かる**(e)** 大人がつくる「やくそく」ではなく、子どもが経験からつくっていく「やくそく」だから伝わる**(f)**

²¹ 心が動く場面こそ、育ちにつながる経験ができると思った**(c)** 子どもの育ちを支える教師の在り方に共感した**(e)** 大人が先回りして、子どもの学びを取り上げない。子どもからの育ちを大切にしていこう**(f)** 教師の姿勢に共感できる。自分もこのような構えでいたいと強く思う**(h)**